
ヴァレンティン家の食卓

木と蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァレンティン家の食卓

【Nコード】

N7075M

【作者名】

木と蜜柑

【あらすじ】

イギリスに留学中の大見快斗おおみかいとは、ひょんなことからヴァンパイアであることを隠し、人間に紛れて生活するクラスメイト、ラディスラス・ヴァレンティンと、その命を狙うヴァンパイア達との抗争に巻き込まれていってしまう。

平凡で純粋な快斗にできることは一体何なのか・・・？
狂い始めた歯車が今、再び廻り始める・・・！！

ヨーロッパで繰り広げられる、ヴァンパイアと人間が織り成す現

代SFファンタジー。恋あり、友情あり、闘いあります。

登場人物（前書き）

難しい名前がたくさん出てくるので、わからなくなったときにご覧下さい。

（一部ネタバレ注意です）

登場人物

おおみ かいと
大見 快斗

横浜出身日本人の高校生。身長一六〇センチと小柄で、平凡な青年。イギリス在住の叔父の勧めで、一年前からパースシャー州にあるリディストン校に留学中である。

ネイサン

リディストン校に通う快斗の友人の一人。顔は悪くないのに、日本のアニメオタク。IQが高い、天才肌。

ヴェラ

快斗の友人。痩せ身の大食い。男っぽい性格。

テッド

快斗の友人。お調子者の女好き。

ジェニー

快斗の友人。顔が広く人気者。面倒見のいい女の子で姉御肌。

ラディスラス・ヴァレンティン

成績優秀で、非の打ち所の無いクラスメイト。由緒正しい家柄の出身で、誰とも馴れ合わない。何か隠している様子だが、快斗以外にそれに気付いた人はいない。

ケイティー・マクレーン

リディストン校でマドンナ的存在。いつもラディスラス・ヴァレンティンと行動を共にしている。

ヴァレンティン家と古くから繋がりのある家系らしい。

レイモンド・ウォレス

人当たりの良い性格で、女子からの人気が高い。ケイティーと同じく、いつもラディスラス・ヴァレンティンと行動を共にしている。マクレーン家と同様、古くからヴァレンティン家と繋がりのある家系らしい。

〳〵ヴァンスハイアー族の生き残り〳〳〳

グレンヴィル・ウォレス

ウォレス家の嫡男。ヴァンスハイアー族の生き残り七人の内の一人。ラディスラスに忠誠を誓う。

優しく正義感の強い男。レイモンドの父。

カーティス・マクレーン

マクレーン家の三男。ヴァンスハイアー族の生き残り七人の内の一人。ラディスラスに忠誠を誓う。

利口で真面目な男。ケイティーの父。

ブルータス・ラザフォード

ラザフォード家の一番の古株。ヴァンスハイアー族の生き残り七人の内の一人。ラディスラスを守ることに使命感を持っている。

シーヴァー・ブラックバーン

純血統の一つブラックバーン家の当主。ヴァンスハイアー族の生き残り七人の内の一人。謎の実父の突然死と兄の失踪で、当主におさまった。しかし、祖父の大罪で、ブラックバーン家の権力は実質剥奪されている。

ドロシア・セヴァリー

セヴァリー家の一人娘。ヴァンスハイアー族の生き残り七人の内

の一人。気が強く、いつの日か種族の頂点^{トップ}にのし上がろうと、野心に燃える。

シーグフリード・ドラクレア

ドラクレア家でも、手のつけられない不良。ヴァンスハイアー一族の生き残り七人の内の一人だが、皆に疎まれる存在。危険人物。

(1) 廻り始めた運命

人は、自分勝手な生き物で、自分たちがまるでこの世界の頂点^{トップ}に存在するかのよう^{よう}に勘違いし、生きている。

人々が日の当たる世界で生きているのならば、いわば彼らはその正反対の闇の世界の住人と言えるだろう。

彼らはひっそりと、俺たちの近くに潜んでいる。

そのことに、このときの俺はまだ気付いてはいなかった・・・。

「カイト！ ランチまだだよな？」

おおみかいと
大見 快斗。横浜で生まれ、育った。

十六歳になるまでは、地元を離れることなんて考えもつかなかったが、中学三年の冬、事態は一変。イギリスに住む叔父のすすめで、彼はリデイストン校へと留学を果たした。

「うん。ただけど」

これはジェニー。留学当初、ほとんどともに話のできなかった快斗に、色々と世話を焼いてくれた女の子だ。しっかり者の彼女の周りには、いつだってたくさんの友人が取り巻いている。

「よかった」

快斗の腕を掴むと、ジェニーはウィンクして食堂へと歩いていく。

彼が到着する頃には、すでに三人のメンバーが丸いテーブルに腰掛けていた。

「カイト、遅いよ」

膨れっ面の眼鏡の彼はネイサン。IQはこのメンバーの中で最も高い。顔は悪くないのに、日本の少女アニメを愛している時点でちょっぴり変わり者と言える。

「早く早く。もうお腹減って死にそう」

痩せ身の長身の彼女はヴェラ。こう見えて、一番の大食いだ。見ての通り、彼女のトレーには男2人分とも思える量のサラダとサンドウィッチが載せられている。

「おい、カイト、忘れてねえよな？ 今日の夜のこと」

意味深な言葉を言っただけ口元をにやつかせている眼つきの悪いマツチヨは、テッド。彼はお調子者で女癖があまり良くない。

「ちよっと、テッド！ 純情ボーイのカイトを悪の世界へ引きずり込まないでよね」

ジェニーがテッドの耳をくいと引っ張り、テッドは「いてて」と顔を顰める。

「早く食べるもんとつてきなよ。先食べちゃうよ？」

ヴェラが痺れを切らしサラダをつつき始めた。

「ああ、ごめん。俺ちよっとトイレ行ってくるから先食ってて」

俺はそう言っただけ、皆を残しトイレへと向かう。

今朝からちよっと腹の具合が良くない。昨晚に食べた残りもののスープがいけなかったのかもしれない。

「わかった。早くね」

ジェニーに見送られ、俺は軽く腹を押さえて一番近くのトイレへ

と駆け込む。

ここのトイレは薄暗いせいか、たいていはすいている。俺も、あまり薄気味悪いのは得意じゃないから、普段はこのトイレは使わずに別のトイレを使うのだが、今日はそうも言ってられそうになかった。

「やべえ。こりゃ当分出られねえかも」

思わず日本語で呟きながら、先程にも増して痛みの強くなる腹部になるたけ力を入れないようにしながらトイレのドアを開くと、ぱつたりと鏡の前にもたれ掛かるようにして立っていた人物と目がかち合った。

この薄暗いトイレを使用する生徒がいたことに驚いたこともあるが、それよりも、快斗はここにいた男子生徒と目が合ったことに驚いたのだと思う。

目の合った瞬間、俺は一瞬金縛りにあったような不思議な感覚に囚われた。

（こいつ、こんなに青白かったっけか・・・？）

クラスメイトのラデイスラス・ヴァレンタイン。

快斗がここへ来てから約二年の月日が流れたが、彼とは一度も口をきいたことはない。

彼は由緒ある家の出らしく、気軽に友達と馴れ合ったりは決していない。

快斗の知るところ、彼はかなりの教育を受けてきたようで、他の生徒とは違った空気を纏っている。教養豊かで、スポーツも人並み外れてよくできる。どういう訳か、こういう男に限って見た目もず

ば抜けていいときた。黒に近い焦げ茶の髪は、知的な雰囲気醸し出していると、女の子達がよく噂していた。

確かに男の目から見ても、彼には非の打ち所がまるで無いように見えた。

無言のまま数秒程互に見詰め合っていた二人だったが、俺は腹痛に耐えきれずに慌てて視線を逸らして個室へと飛び込んだ。

しばらく個室に籠っていた快斗だったが、扉の開く音はしない。ヴァレンティンはまだ鏡の前で突っ立っているのだろうか、とふとそんなことを思った。

だが、あまりにも静かすぎる。

まるで快斗以外の誰もいないかのような静けさ。

(ひょっとして、俺の気付かないうちに出てったとか・・・?)

しばらくして、腹痛が少しおさまったところで、快斗はもうすっかりヴァレンティンの存在など忘れてしまったかのように個室から気だるげに出ようとした。

「!」

快斗は思わず驚いて一步後ずさる。

快斗が個室に籠ってから二十分は経つだろうに、彼はまだ変わらぬ姿勢でそこに突っ立っていたのだ。

気まずい空気が流れ、俺は彼のすぐ脇にある洗面台で手をさっさと洗ってトイレを出口にした。

何くわぬ顔で水道の蛇口を捻り、手を洗い始めたところで、ふと鏡に映った彼の横顔が視界に入ってきた。

異様に青白く、ひどく具合が悪そうに見える。

「おい、ヴァレンタイン。具合が悪いのか・・・？」

気がつけば、快斗は無意識のうちに彼に話し掛けていた。

彼は無言のまま視線を床に落とす。

「誰か呼んで来ようか？」

そう言っ、彼の表情を覗き込んだ瞬間、「いい」と無愛想な返事がかえってきた。

「けど、お前、すげえ顔色悪いよ？」

そう言った直後、手首をすごい力で掴まれ、快斗は驚き彼の顔をまじまじと見つめた。

尋常じゃない程に冷えた手。

手首がぎりぎり締め付けられ、快斗は思わず顔を顰めた。

「薬が切れたただけだ。早くどこかへ行ってくれないか」

目を細め、強い口調でそう言った彼に、快斗はなんとか手首と掴む彼の手を振り解き、逃げるようにしてトイレを後にした。

（なんだ、あいつ・・・。人がせつかく心配してやってんのに・・・）

掴れていた手首にはくつきりと手の形が浮き出ている。余程強く握られていたのだろう。

「ちくしょ、強く握りやがって」

愚痴をこぼしながら俺は仲間のもとへと向かった。

「もうっ！ カイトったら遅いー！」

ジェニーが膨れっ面で、氷だけになったグラスをストローでつついている。

「お前、まさかトイレに行くっていう口実で、女の子とトイレでいいことしてたんじゃないやねえだろうな？」

テッドがにやつきながら椅子に腰掛けたばかりの俺のわき腹を肘で小突いてくる。

「あんたと一緒にすんなつての。この純情ボーイがんなことする訳ないじゃん、ね？」

ヴェラがサンドウィッチの最後の一口を頬張りながら言った。

「確かに。カイト、何か変なもんでも食ったんじゃないか？」

眼鏡拭きを取り出し、命の次に大切にしているという愛用眼鏡を念入りに磨きながら、ネイサンが言った。彼の言うことは正しい。

「まあ、そんなことよりさ、トイレでヴァレンティンに会ったぜ」
そう言つと、ヴェラとジェニーがやけに前のめりになって食いついてくる。

「えっ、まさか、あのラディスラス・ヴァレンティン！？」

頷くと、二人は顔を見合わせて目を丸くした。

「あいつと話したことある？」

と、質問すると、四人は顔を全員首を横に振った。

「彼はわたしたちみたいない一般人なんか相手にしないよ。」

彼と対等に話ができるのは、ケイティー・マクレーンかレイモンド・ウォレスくらいでしょう？」

「言えてる。」

彼はすごくイケてるけど、ちょっと近寄りがたい感じ。

ケイティーとレイモンドは彼の遠い親戚だと聞いたことがあるけど、三人ともなんだか謎めいた雰囲気があるっていうか……」

ヴェラとジェニーが言うことはおそらくほとんどの生徒が思つて

いることで、それには快斗も同意見だった。

「そんなこと聞くてことは、カイト。君、彼と話したね？」
さすがネイサン、読みが深い。

「ああ、まあ。具合悪そうだったから声掛けただけだけど」
ヴェラはますます前のめりになって、興味深々といった様子で聞いている。

「で、何を話したの??」

ジェニーの質問に、快斗は溜息をつきながら溢した。

「どっか行けってさ」

そう言った直後、四人の動きがぴたりと静止し、すぐ後にテッドが「ぷっ」と吹き出した。

「カイト、そりゃあ完全に邪魔者扱いじゃねえか！ ラデイスラスの奴もなかなかやるな!!」

テッドが大声で笑っているすぐのを、ヴェラが服の袖を引っ張って「黙んな！」と慌てて止める。

ジェニーとネイサンも何かに気付いたようで、視線を同じ方へとやる。

ケイティー・マクレーンとレイモンド・ウォレス。

二人がゆっくりとこちらへ近付いてくるのが見えた。

（まずい、聞こえてたか・・・？）

赤毛のふわりとした髪を耳に掛けながら、ケイティーが俺達のテーブルの前でぴたりと足を止めた。

「ご機嫌よう。今、ちらつとラディの話が聞こえたものだから・・・

。

その、彼を見かけなかった？ わたし達、彼を探してるんだけど、見当たらなくて」

恐らくは、快斗だけじゃなく、ここにいるネイサンやテッドも顔を赤くしているに違いない。

彼女には全ての男を虜にする摩訶不思議な魅力が備わっていると、快斗は思っていた。

「えーっと、ここにいるカイトがトイレで見たって」

ジェニーは親しみのある笑顔を作りながら、ケイティーに返した。

「どこのトイレで見たって？」

そう言ったのは、後から到着したレイモンドだった。

彼は同じ歳とは思えない程落ち着いた大人びた声をしている。

ブロンドの髪を肩の当たりで切りそろえ、彼はいつも一つに後ろで結わえていた。

人付き合いをあまりしないヴァレンティンとは違い、彼はいつだって人当たりのよい笑顔で他の生徒に接していた。そのせいか、彼に好意を抱く女子生徒も少なくないと聞く。

「あ、えーと。あそこのトイレだよ。なんか具合悪いみたいだったけど」

ケイティの視線が俺に向いていることに、些か緊張を覚えながら、俺はあの薄暗いトイレの方角を指さして言った。

「そう、どうもありがとう。行ってみるわね、カイト」

にこりと全てを魅了する笑みを浮かべ、ケイティはレイモンドと去っていった。

しばらく快斗達男組は、夢心地で余韻を楽しんでいたが、ジェニーの一言ですぐに現実に引き戻されてしまった。

「ケイティーとレイモンドって付き合ってるのかしら」

と、いう言葉に。

「ラデイ、大丈夫？」

薄暗いトイレの中で、彼は先程と変わらない姿勢のまま何かに必死で堪えていた。

ラデイスラス・ヴァレンタインは言った。

「血清の効果が切れた」

レイモンドは胸のポケットから黒く細長いケースを取り出し、ラデイスラスに手渡す。

「血清はこれで最後だ・・・」

手渡されたケースの蓋を開けると、透明で水よりも少しとろみのある液体が注射器の中に収められている。

「貴族院は一体何をやってる？ まだ見つからないのか」

注射器の先に取り付けられているキャップを外すと、ラディスラスは慣れた手つきで自らの腕に液体を注入した。

「・・・もう限界だ、僕が本部へ行く」

「ダメよ。貴族院からこちらから連絡を取ることをきつく禁止されているじゃない」

ケイティーはぎゅっと自らの腕を抱くように身を固めた。

「だが、このまま僕たちが血清なしにいられると思うか!？」

床を睨むようにして、ラディスラスは言った。

「だが、ここで俺達が動くことで、数年かけてこうして人間達に紛れうまく身を隠してきた努力が無駄になるかもしれない・・・。奴らに居所知られる可能性もある」

レイモンドの言葉に、ケイティーも深く頷いた。

「そんなことはよくわかっている！

でも、血清がなければこうして人間に紛れることも難しくなる。それに、さっきだってやばかった・・・」

青白かったラディスラスの顔に血の気が戻っていく。

「何のこと？」

レイモンドの問に、ラディスラスがうんざりしたように答えた。

「ここに人間が来た。

僕がどれだけ必死で襲いかかりそうになる衝動を抑えたのか知らないだろう」

ケイティーが「ああ」と小さく納得し、ふふつと可愛らしい笑みを溢した。

「何がおかしいの？ ケイティー」

レイモンドの単純な疑問に、ケイティは言った。

「ここに来た人間って、きっとカイトのことでしょ？ ね、ラディ」
ぶすつとした表情でラディスラスは溜息をついた。

それにはレイモンドも納得したらしく、「ふうん」と意味深な笑みを浮かべた。

「確かに、彼って魅力的だね。彼はなんだか特別……。
そう、東洋の神秘ってやつかな？ わたしもきつと血清の効果が切れたら、自分を抑え切れるかどうかわからないわ」

ラディスラスは黙ったまま、思考していた。

血清の効果は長くもって二週間。

それまでになんとかしなければならぬ。

「何を考えてる、ラディ」

レイモンドは何かよくないことを考えているときのラディスラスが無言になることをよく知っていた。

「……」

驚いたように、ケイティーがラディスラスを振り返る。

「危険すぎる！ そもそも、わたしとレイモンドは、父達から貴方を奴らから守るよう言われてる。

貴方をみすみす危険に晒すようなことなんてできないわ」

レイモンドが言った。

「いや・・・、けれど、ラディの言うように、このまま血清が切れて身動きが取れなくなるのもまずい。

そうなれば、周囲の人間達も俺たちが違うということに勘付き始めるだろう」

ラディスラスは青く澄んだレイモンドの瞳を見つめた。

まるで、次に彼が何を言い出すのかを知っていたかのように。

「だが、君はここにいろ、ラディ。動くのは俺だけで十分だ」

レイモンドは動揺のない言葉で言い切った。

「レイ！ そんなことをしたら、貴族院のお咎めを受けるのはあなただけになってしまうじゃない」

ケイティーの抗議に、ラディスラスは静かに目を閉じ、小さく息を漏らした。

「ケイティーの言う通りだ。

まだ2週間の猶予がある。その間に何か有効な手立てが見つかるかもしれない・・・」

このとき、ラディスラスの脳裏には、ある少年の姿が浮かんでいた。

なぜ彼の姿が浮かんだのかは本人にもわからなかったが、どういう訳か、あの澄んだ黒い瞳がじつと心配そうに覗き込んできたときの様子がフラッシュバックしてきたのだ。

数年前、留学生としてやってきた”カイト・オオミ”。

東洋人であること以外、彼はラディスラスの興味を引き付ける要素を何一つと持ち合わせていなかった。ほとんどまともにこちらの言葉を話すことのできなかった彼が、今では全くといっていい程言葉の弊害を感じていないことに些かの感心は無いことも無かったが。

こちらでは百六十センチ程しかないカイトは小柄で、そしてそれは彼を幼く見せる。

学力も運動能力も人並み。特に目立つ容姿をしている訳でもない彼だったが、なぜか人を引き寄せる不思議な空気を纏っている。

ラディスラスの顔を覗き込んできた彼の眼は、真っ直ぐで、裏表のないものだった。

そこには、恐れや疑心、不安は一切含まれておらず、単純な良心と親切心だけが伺えた。

「さ、そろそろ午後の授業が始まるよ。行きましょ、ラディ。皆が不審に思い始める前に・・・」

ケイティの言葉に、ラディスラスはゆっくりと顔を上げた。そして、真白い手で滑らかな目蓋に僅かに触れた。まるで、何か余計な考えを忘れようとする仕草のように。

（カイト・オオミ・・・）

快斗は、腹痛を理由に寮へと一人戻ってきていた。

腹の具合はおさまるどころか、より一層ひどくなる一方で、快斗はトイレを出たり入ったり往復することを余儀なくされていた。

昼間、ラディスラス・ヴァレンタインに握られた手首は、少し赤くなっている。

「今日はなんか踏んだり蹴ったりだよな・・・」

自室の鏡の前でいつもよりかはげっそりとしている自分の顔を見ながら、快斗は日本語で溢した。

そうしながらも、どういう訳かあの薄暗いトイレで異様に青白く顔色の悪いラディスラス・ヴァレンタインの様子に、やはり違和感を感じずにはいられない自分がいた。

（あいつ・・・、一体あのトイレで何してたんだ・・・？）

ケイティーとレイモンドがあの後あの場へ訪れて、どうなったのかまでは知らない。

ただ、あの二人はきつとラディスラス・ヴァレンタインの何かを知っているような気がしてならない。

だけど、俺は知らなかった。

すでに、あのトイレ彼と鉢合わせしてしまったことで、終わなき運命の齒車が廻り始めていたことに……。そう、決して戻すことのできないその齒車は、僕の意味とは無関係に動き続ける。

前の晩に、残りもののスープを口にしていなければ……。

もしくは、あのトイレに行っていなければ……。

そして、ラディスラス・ヴァレンティンに声を掛けていなければ……。

その全ては、なるべくしてなった結果なのだ。

運命はときとして皮肉なもの。

何も知らない俺はまだ、幸せな日々的一端を過ごしていたんだ。

(2) 始まりは死

俺は見上げていた。

いや、今や瓦礫と泥にまみれてしまった教会の固く冷たい床の上で、天井を向いたまま倒れていたただだ。いつの間にか降り出したどしゃ降りの雨が、ぽつかりと空いた教会の天井穴から容赦無く降り注ぐ。

鉄臭い臭いと液体が口の中から溢れ、数回咽せて咳をしたが、もうその力さえ残ってはいない。

腹部にひどい衝撃を受けたことまではっきりと覚えているが、腹部の状態を確認することなど今の俺には到底できそうになかった。ただ、ぬるりとした嫌な触感を、地面を背にして倒れた直後に触れた指先で感じていた。

痛みは無かった。

視界の端つこに、傾いた十字架が僅かに見えた。

そして、黒く曇った空が何かを嘆き悲しんでいるんじゃないかと俺は思った。

遠くなる意識の中、僕は今朝叔父の幸太郎からかかってきた電話をふと思い出していた。

『快斗、元気か？』

俺をこっちに呼び寄せた叔父の声が、携帯の電話越しに聞こえる。

「うん、元気だってば。叔父さんてば、それ毎日訊いてる・・・」

入寮が決まった日から、叔父はこうして毎日欠かさず自らが買
与えたこの携帯に電話を入れてきていた。叔父はひどく心配性のよ
うだ。

『しかしだな、昨日と今日じゃまた状況が違うじゃないか。君を弟
から預かってるんだ。イギリスでは保護者として当然のだな・・・』

叔父の耳タコな説明が始まり、俺は腕時計をちらと見やった。

「あのさ、叔父さん。そろそろ寮を出ないと、授業に遅刻する羽目
になるかも」

時計の長針はとづくにいつもの数字を通り越していた。今すぐ走
って向かわなければ最悪の状況になり兼ねない。化学のアップルヤ
ード先生は、遅刻には厳しい。たった一度の遅刻で、ずっと彼の実
験の準備と片付けの手伝いをさせられる羽目にはなりたくはなかつ
たのだ。

『ああ・・・、そうか、忙しい時間に悪かったね・・・』

叔父の戸惑った声に、俺は「じゃあね」と言って携帯の通話ボタ
ンを押しかけた。

『ああ、だが快斗、一つだけ言わせてくれ』

俺は自室の扉のノブに手を掛けながら、首を傾げた。

『最近、何か変わったことはないか？』

「いや・・・、特に無いけど・・・？」

いつもとは様子の違った叔父の言葉に俺は少し違和感を覚えてい
た。

『そうか、ならいいんだ。もし、何かおかしいことが起きたとして
も、決して近付くんじやないぞ。』

危険だと思ったらすぐにその場を離れなさい』

一体何を意図して言ったことなのかは全く俺には理解できなかった
が、とりあえず叔父を安心させる為に俺は「わかった」と返答し
て通話を切ったのだった。

叔父はひょっとして何か知っているのかもしれない……。ふとそんなことが俺の頭を過ぎった。

いよいよ視界が霞み始めた。

見上げていた真っ黒な空の真ん中に、しつとりと濡れた見覚えのある男の顔が現れた。

立ったまま俺を見下ろすそいつは、なぜか腑に落ちないという表情でこう言った。

「なぜ僕を庇った」

庇っただって？ 俺だって一体どうしてこんなことになってしまったのかわからない。逆に訊きたい位だ。叔父の言うように、何かおかしいことが起きてても、近付かなければ良かったのだろうか。いや、きつとこれは避けては通ることのできなかったことに違いない……。

24

「知らねえよ、気付いたら身体が勝手に動いてたんだよ……」
俺は掠れた声でなんとかそう答えた。

見下ろしたままのラデイスラス・ヴァレンティンは、冷たい声で言い放った。彼の瞳は暗がりのせいにか紅く染まっているようにも見える。

「内臓が飛び出している……。お前はもうすぐ死ぬ」
とんでもないことを口にしたクラスメイトに、俺は思わずずりと笑いを溢した。

（は……。こんな外国の田舎の地でグロい死に方するとは……。母さん悲しむかな……。）
ただ、もうすぐ死ぬんだろうなということはすんなりと理解でき

た。

けれど、十七歳という若さで人生に幕を下ろすことと、見知らぬ地で息絶えること、そして横浜にいる両親に別れを言えなかったことだけが只々悔やまれる。

「僕の僕しもへになれ」

朦朧とする意識の中で、奴が何かとんでもないことを言ったような気がしたが、俺はもうそんなことはどうでも良くなっていた。

ただ、今は眠りたい。俺は目を閉じた。

「おい、返事を聞く前に死ぬな、カイト・オオミ」

今度はすぐ耳の傍で奴の声を聞いた。

「もう一度質問する。僕の僕しもへになるか？」

眠くてもうどうでも良かった。早く静かにして欲しくて、俺は取り敢えず小さく頷いた。まさか、あんなことになるとは知らずに・・。

「契約成立だ、カイト・オオミ。お前は今から僕のものだ」

最期の力でなんとか目を開いたそのすぐ前に、赤く光を放つ奴の眼と、そして青白く美しい顔が不敵な笑みを浮かべて俺を見つめていた。それを最期に、俺の意識は遠のいていった・・・。

イギリスのパーシャー州の北端、片田舎の森の奥に、快斗の留学先であるリディストン校は存在する。

この辺りに住んでいた大貴族から買い取った古城を校舎として使用しているこのリディストンは、由緒正しくそして古めかしい風習の残る学校だ。

大見快斗はそんなところへやってきた、世間知らずのただの日本人だった。

そして、あの日、トイレで出会ったクラスメイトのあいつ。ラディスラス・ヴァレンタインは、このリディストン校の理事長をつとめる人の近しい親戚にあたるそうだ。なんでも、由緒ある貴族の血筋だそうで、誰とも馴れ合わないのが奴の主義。唯一行動を共にしているのが、ケイティ・マクレーンとレイモンド・ウォレスの二人で、二人の家も古くからヴァレンタイン家に仕えてきている家の出身だと密かに噂になっていた。

兎も角、快斗はあの日以来、ラディスラス・ヴァレンタインのことを考えただけでむかつ腹を立てていた。

しかし、それは放課後に起こった。

リディストンの素晴らしいところは、空気が澄んで綺麗なところと、そしてこの素晴らしい自然だ。

快斗はこの堪らない陽気に、思わずオレンジジュースの紙パックを片手に中庭のベンチで暢気にうとうとしていた。

「お前には緊張感というものがまるで無いな」

突然降ってきたぶつきら棒な声に、快斗はびくつと小柄な身体をこれ以上ない程に揺らして数センチベンチから飛び上がった。

まだ夢心地の視界に入ってきたのは、あの人を見下したような顔つきのラディスラス・ヴァレンタインだ。

「ふふ」

そのすぐ傍から、可愛らしい声が湧いてきたかと思えば、リディストンのマドンナ、ケイティの姿がそこにあった。

そのケイティが自分の口元を指差して何か合図している。

慌てて口元を空いた手の甲で拭えば、ねっとりとした涎の痕。

顔から発火しそうな程赤面して、快斗の頭から一気に眠気が吹っ飛んだ。

「な、何か用？」

あのトイレでの一件を根に持っていることもあり、次にすれ違ったときに厭味の一つでも言ってやらなくてはと思っていたのに、反して突然の出現に、快斗の計画はすっかり狂わされてしまっていた。「お昼寝の邪魔してごめんなさいね、カイト。今、いいかしら？」憧れの女の子に恥ずかしい場面を見られてしまったことに、すっかり動揺していた快斗は、こくこくと頷いて先程の失敗を頭から葬り去りたい一心だった。

「この前のトイレのことなんだけど、ラディがすごくひどい態度を取ったみたいで……。謝りに来たの」

申し訳無さそうなケイティの隣で、むすつと不機嫌な表情のラディスラスが面倒くさそうに溜息をついている。

「なぜ僕がこんな奴に謝罪しなければならぬ」

やっぱりどうも好きにはなれそうにないこの男の態度に、快斗は口元をひくつかせた。

「ラディ」

静かで可憐なケイティの声に諫められ、ラディスラスはぶいっとそっぽを向いてすたすたと立ち去っていつてしまう。

「ちょっと、ラディ!？」

「いいいいいよ、俺は全然気にしてないし」

慌てたケイティの声に、快斗は苦笑いしながら止めに入った。これ以上彼の機嫌を損ねて後始末に追われる彼女が不憫に思えたからだ。だが、決して彼に憤りを覚えていない訳では無かったが。

「ほんとごめんね。彼の代わりに謝わらせてくれないかしら。

彼、このところ体調が優れなくて……。この前のトイレで酷い態度だったのはそのせいなの」

ケイティーの意外な話に、快斗は持っていたオレンジジュースのパックをベンチの上にそつと置いた。

「ヴァレンタインの奴、病気なのか？」

そう訊ねた快斗に、ケイティーはちよつと困った表情を浮かべて微笑んだ。あまりの可憐さに心臓が飛び出しそうになるのをなんとか堪えて、冷静を装ってもう一度彼女の瞳を見つめる。

「そうね、病気みたいなものかもしれないわね……。」

確かに、あの日、彼の顔色がひどく悪かったのは覚えている。あれは持病の発作か何かを起こしていたのか……。

「でもね、これは個人的なお願ひなんだけど……。その……。ラディの病気のことは誰にも話さないでいて欲しいなって」

どうやらあまり公にはして欲しくないケイティ様子に、何か事情があることを悟った快斗は、個性豊かな友人達には話さずに、そつと心の中に留めておこうと決めたのだった。

「いいよ、わかった。秘密にしておくよ。何か事情があるんだろ？」
こくりと頷くと、ケイティーはそつと俺の耳元で耳打ちした。

『もし秘密がばれたら、彼、君を殺しかねないわ』

真つ青になつて固まつてしまった日本青年の姿を見て、ケイティーがぶつと笑いを吹き出した。

「カイトったら、冗談よ？ 君つて本当に純情なのね」

小さくウィンクすると、ケイティーはふふつと笑いながら手を振った。

「じゃあね、カイト。楽しかったわ。またお話ししようね」

ふわりと春風のように走り去る彼女の背を目で追い、ほんの他愛の無い話にも関わらず、まるで夢の一時だったと思わず口元を緩めてしまう。ラディスラス・ヴァレンタインの一件さえ無ければの話だが。

「やっと追いついた」

ケイティーが相変わらず不機嫌なラディスラスに声を掛けた。

「あいつに余計なことを言ってはいないだろうな」

ちつとも怯んだ様子も無く、ケイティーは早足で歩を進めるラディスラスに返す。

「いいえ。ちよっぴり貴方の体調が優れないって言っただけよ」

明らかに気に障った様子で、ラディスラスは僅かに目を細めた。

「あいつに関わるな。人間と関わるとロクなことが無い」

肩を竦め、ケイティーは小走りで彼の後を追う。

「そうかしら。ラディだつてまんざらでもないかと思ったけど。

彼に珍しく興味持つてみたいだったから」

ふんつと鼻で笑うと、

「僕が？」

ラディスラスは周囲を警戒したように見回すと、声を落として言った。近くに誰の気配も無いことを確認したのだ。

「それより、まずいいことになった。血清の効果が切れかかっている」
えつと目を丸くし、ケイティーはラディスラスに振り返った。

「でも、まだ一週間しか経ってないわよ？」

「僕もまさかとは思ったが、切れる前の兆候が出始めている・・・。
見てくれ」

ラディスラスが服の袖を捲ると、わずかに赤くなった皮膚が見られた。

「授業中に窓から差し込んだ日差しを手に浴びた。そしたらこうな
った」

ケイティーとレイモンドが血清を注射したのは、ラディスラスの
二日前にあたる。けれど、その効果は

いまだ持続している。けれど、その効果が確実に短くなってきている
ことは確かであった。

「今の血清の効果じゃ、もうラディには十分じゃなくなってきたい

るんだわ・・・」

ケイティーは赤くなったラディスラスの腕を見つめながら、ぽそりと溢した。

「けれど、これは僕だけの問題でも無い。つまり、血清自体の純度が落ちてきているんだ。以前は一度の接種で数年効果は持続していた」

ケイティーは小さく頷いた。

「レイから連絡は？」

ラディスラスは上等な上着の胸ポケットの中から、折り畳まれた手紙を静かに取り出した。

「今朝届いた。レイモンドの奴、ロンドンの郊外で貴族院の遣いと落ち合うことに成功したらしい」

手紙を受け取ったケイティーは、そつと手紙を開くと、レイモンド直筆であろう美しい文面に目を通していった。

『昨晚、貴族院の出した遣いとロンドン郊外の酒場で落ち合うことに成功した。

血清を持つて来るよう依頼していたが、残念ながら彼はそれを持つてはいなかった。今、数百年前に培養した血清がまさに底をつきかけているそうだ。血清を作り出すには、また新たな”特別な血”を探し出す他に方法が無いとのこと。貴族院は今、世界中を駆け巡り、片っ端から”特別な血”を探しあさっていると彼は話していた。どうやらしばらくは、血清無しでここを乗り切るしかなさそうだ。

おそらく気付かれてはいないとは思うが、万が一奴らにつけられていることを仮定して、俺はわざと遠回りして別ルートでそちらへ戻る。少し予定よりも戻るのが遅くなるかもしれないが、心配しないようケイティーにも伝えておいてくれ。

君の友 レイモンド・ウォレス』

ケイティーは深く息をついた。

レイモンドからの手紙は、とても深刻な内容のものであった。人間に紛れることで敵から身を隠す暮らしをしてきた三人にとって、血清が手に入らないというのは、絶対的な痛手である。

「貴族院が”特別な血”を探し回っているですって？ 数百年に一人しか現れないたった一人の人間を？ その人間がこの広い世界のどこに住んでいるのかもわからない、大人なのか子どもなのか、そして男なのか女なのかわからないのに・・・？ しかも、その人間が今この時代に存在するのもわからないじゃない。いくら探したってきつと見つかりっこ無いわ！ それならいつそ、全面戦争に備えるべきじゃないのかしら！」

すっかり貴族院に不信感を抱いてしまっているケイティーに、ラデイスラスは諫める。

「まだその時じゃない」

「けど、ラデイー！ このままじゃ、奴らに今の居場所さえも嗅ぎ付けられてしまうのは時間の問題よ？ 奴らは今か今とあなたの首を狙っているに違い無いのにつ」

ラデイスラスは、服の袖を下ろすと、傾きかけている太陽を見つめた。

「兎も角、今はレイモンドの帰りを待つしかない。今の状態じゃこの太陽の光でさえ負担だ・・・。

僕はしばらく教会の地下へ身を隠すよ」

手紙をラデイスラスに返すと、ケイティーは頷いた。

確かに、彼の血清の効果が完全に切れてしまうのはもう時間の問題と言えた。

「ええ・・・」

不安そうなケイティーの声が小さく風に消えた。

快斗は腕時計を見下ろして溜息をついた。

（テッドの奴、また遅刻か・・・？ 自分が言い出したくせに）
アメリカ出身の彼の時間にルーズな面はいつものこと。快斗は湿っぽい空気に思わず深夜の空を見上げる。

（まずいな、もうちょっとしたら一雨くるかな・・・）

雨雲が空を覆っていて、星が一つも見当たらない。

「・・・つたく、こんな日に呼び出すなんて。・・・って、テッドらしいか」

言い出したら聞かないところは快斗自身よく知っている。そもそも、こんな片田舎で、寮を深夜に抜け出して何をしようというのかどちらにしろ、せいぜい丘の上でテッドがどこかしらでくすねてきたビール片手に彼の男女の云々を一晚中聞き明かすことにはなりそうだ。

とはいえ、一向に来る気配の無いテッドに、快斗はとりあえず近くにある木にもたれかかって気長に待つことにした。彼が来るのが先か、雨が降るのが先か・・・。

何もない田舎の風景だが、快斗はこの田舎の風景を気に入っていた。普段の月明かりの綺麗な晩ならば尚更良かったのだが、生憎の天気で、今日は持ってきた携帯の明かり以外に周囲を照らす手助けをする物が何も無かった。

ふいに近くの茂みから土の踏み締める音が僅かに聞こえた。
「テッドか？」

振り向いたとき、暗闇の中でぎらりと赤い何かが光った。

「テッド・・・？」

明らかに彼の気配では無い。何か不気味な、背中がぞくりと粟立つような嫌な感じがした。

本能的に、なぜかすぐそこから逃げなければならないような気がした。

『そうか、ならいいんだ。もし、何かおかしいことが起きたとしても、決して近付くんじやないぞ。』

危険だと思っただけならすぐにその場を離れなさい』

叔父の今朝方の叔父のセリフが頭を木霊する。

快斗はなるたけそれを刺激しないように、そつと後ずさるようにして立ち上がった。

闇の中で光る二つの赤い光は、じつと快斗の動きを追っている。

（目だ・・・！　なんだ、狼か・・・？　熊か・・・？　ってか、こんなところにそんなもんがいるのか・・・？！）

そもそも赤い目の獣なんて聞いたことが無い、なんて思いながら快斗は一步、一步とそれからゆっくり後ずさる。

「おい、マローウ。ここいらでそろそろ食事にしねえか」

唸るような低い声に、快斗はびくりと身体を揺らした。

獣と思っていたその目の主が突然言葉を発したのだ。

「ちようど美味しそうなのがいるじゃないの。アタシ、喉渇いちゃって」

その後ろから、音も無くもう一つの何かが現れ、同じような赤く光る目で快斗を見つめている。

（な、なんなんだ・・・！？　こいつら、一体・・・）

きつと、今すぐ全速力で逃げなければならぬ。快斗は直感でそ

う感じ取った。

快斗はこれまで嘗て無い程の速さで丘を駆け下りた。赤い目達
が動き出すよりも先に、決して後ろを振り返ることなく。

「あら、逃げてくわ」

離れゆく丘の上から、暢気そうな男の声が響いた。

快斗は恐怖を抑え込み、今はとにかく走りに走った。これ程まで
本気で走ったことがない程に。

ここから一番近くて人がいそうな場所といえば、森の外れに位置
する古びた教会だった。

汗身体中から噴出すのを感じたが、そんなことはもうどうでもよ
かった。快斗は兎に角走りに走った。

しばらく走って、ここまで走れが正直もう追っては来ていないだ
ろうという気持ちはどこかにあっただろう。ふと足を緩めようとし
たその瞬間、

「逃げてみな」

あれほど引き離れた筈の聲が、快斗のすぐ頭上から降ってくる。

それは、音も気配も無く、それは息一つ乱すことも無く。

「人間にしては、いい走りっぷりしてるじゃない」

まるでゲームを楽しんでいるかのように、もう一つの声の脇か
ら突然現れた。

（くそつ、教会はまだ着かないのかよ・・・！）

きつと、この赤い目達は、今すぐにも快斗を簡単に殺つてしま
うことなど他愛も無いことに違いなかった。今の快斗は、彼らの遊
び心一つに、快斗は単に生かされているにすぎないのだ。

いつ辿り着いたのかも気付かない程に、快斗は必死の形相で教会
の古びた扉を乱暴に開けた。

勢いよく空いた扉の中は、快斗の希望とは裏腹に、一人の人影も

気配も無く、ただ、十字架の下の小さくなった蠟燭の火が、ゆらゆらと薄暗い教会内を灯していた。

「まじかよ・・・」

落胆して、よろめく快斗の背に、とすんと何か堅いものがぶつかった。

「ご苦労さん、やつと着いたわね、教会。楽しい鬼ごっこだったわ」
驚き降り向いた快斗の目の前に、ウェーブのきつい赤毛の長髪を、無造作に束ねた男が楽しそうに立っていた。その目は血のように赤く、肌は死人のように青白い。

「だが、そろそろお遊びも終わりだ」

いつの間に背後に回ったのか、今度はそのすぐ対面にアングロサクソン系の男が腕組みして快斗を見下ろしている。

「お、お前ら何者なんだ・・・？」

何とかそう言葉を搾り出した快斗の目に、二人の唇から通常では考えられない程の鋭い牙がぎりりとむき出しになったのが映った。
「今から食事になるうという君が、そんなこと知る必要なんてないでしょ？」

”抵抗”という言葉も出ない程、快斗を物凄い力で背後から羽交い絞めにし、その脈打つ首に二人が牙を突き立てようとしていた。
襲い来る強い痛みに加え、快斗は思わずぎゅっと目を閉じて恐ろしいその時を待った。けれど、その瞬間は来なかった。

男達が、ピタリと突然その動きを止めたのだ。

「・・・何か匂わねえか？」

小さく首を傾げ、くんくんと鼻をきかせると、マールウと呼ばれた赤髪の男はじつと目を細めた。

「ええ、・・・同族かしら」

それと同時に、誰もいない筈の教会内に、いつの間にかもう一人別の人影が増えていることに快斗は気付いた。

「だあれ？」

マールウと呼ばれるが問うた。

羽交い絞めにされていた手を緩められはしたものの、未だ解放されず掴まれた腕はぎりぎり痛み。快斗は、痛みに僅かに顔を顰めながら、薄暗闇の中のもう一つの影を目を凝らして見つめた。

（あいつ・・・！）

「ここに何の用だ」

この状況にも関わらず、冷静な聞き覚えのある声。

（ヴァレンティン・・・！　なんであいつが・・・！）

「あら、ここはあなたのエリア？」

突然ぱつと腕を突き放された形になり、床に尻餅をついた快斗を他所に、黒髪の男が愉快そうに口を歪ませた。

「俺達が見つけた獲物だ。横取りする気じゃねえよな？」

快斗の頭の中で警告音が鳴り響いている。二人が彼に気をとられている隙に、今すぐにここを離れるべきだと。そうすれば、ひよつとすれば助かる見込みはあると。

「勝手なことはやてくれないか。ここで問題を起こされては迷惑だ」
不機嫌なラディスラスの声。黒髪の男が到底人間の動きとは思えない程の速さでラディスラスの目前まで瞬時に移動をした。

「悪かったな。俺らはその獲物を持ってさっさと出ていくさ、熱くなるなよ、同志」

ほんと馴れ馴れしい素振りだ。男はラディスラスの方に腕を回すと、じつと目を細めてしばらく静止した。

「・・・ところでお前、どの出身だ？　・・・というより、完全体じゃねえな？　お前、ハーフだろ」

男の腕を払いのけると、汚い物でも払いのけるかのように、ラディスラスはぱんぱんと肩の埃を叩き落とした。

「おい、マールウ、こいつハーフだぜ！　けっ、完全でもねえ下っぱって訳か！」

「まじ？　ハーフ？　さすがこんな田舎だわね、この辺っても

しかしてハーフの生息地って訳？」

ラディスラスの表情は変わらぬまま。ただ、冷たく二人を静かに見つめている。出て行けとでもいうかのように。

その様子を見ていた快斗は、頭の中で鳴り響く警告音と、状況の飲み込めないパニックで今まさに頭から煙が噴出しそんな状態だった。

（今なら、きつと逃げ出せる・・・！　けど、ヴァレンタインは・・・？）

「ねーえ、アタシほんとに喉渴いちゃった。そんな子放っておいてさっさと食事にしちゃいましょうよ」

マールウの一言で、快斗は顔から一気に血の気が引いていくのを感じた。

「それもそうだな」

黒髪の男が何事も無かったかのように快斗に向き直った瞬間、物凄土埃がぶわりと舞い上がった。

めりめりとめりこむような音が鳴り響く。驚き、快斗は一体何が起こったのかとにかく音のした方に視線を泳がせた。

先程までラディスラスの前にいた筈の黒髪の男の姿はそこらになくなり、変わりにどういう訳か古い教会の壁に頭からめり込むようにして倒れている姿があった。その周囲には崩れた石と砂埃が舞っている。

「あんた、いきなり何するのよ」

怒りを露わにしたマールウから察するに、ラディスラスが黒髪の男に一撃を加えたのは明らかであった。驚くべきところは、その威力である。明らかに人間の常識から外れている。

そして、更に驚くべきところは、その衝撃を喰らって尚、少しのダメージも無いかのように黒髪の男がむくりと起き上がったことであつた。

（おいおい、普通なら死んでるよな・・・？　あれ・・・）

現実ではありえない光景を目にし、快斗は自分の目を疑った。

「……おい、てめえ。ハーフの分際でよくも……。ぶっ殺してやる」

黒髪の男の顔から完全に表情というものが消え去っていた。今、彼の中にあるものは”怒り”。

（ま、まずい……！）

男の鼻はおかしな方向に捻じ曲がっている。それが痛くもなんとも無い筈は無いのに、男は平気な顔でラディスラスに襲い掛かった。明らかにラディスラスの分が悪い。体格差も大きい上、パワーも桁違いだった。

あっけなく吹き飛ばされたラディスラスの身体は、教会の全ての椅子をなぎ倒しながら教会の奥の壁に激突した。

それでも構うことなく、男はラディスラスの倒れた身体を人形のように引っ掴むと、バシバシとそこら中の壁に投げ当てることを止めない。

呻き声一つあげないラディスラスは、すでに死んでいるのかもしれないなかった。

『嘘だろ……？ これって悪い夢だよな……』

思わず口をついて出た日本語に、マールウは首を傾げた。

骨が碎けるような、鈍い嫌な音を立て、今度は快斗のすぐ傍にラディスラスの身体が叩き付けられた。

驚きで咄嗟に目をやった時、彼の手がぴくりと動くのを快斗は見逃さなかった。

（生きてる……！！）

ラディスラスはこれだけの攻撃を受けておきながら、まだ生きていた。

「やめだ、この下種め」

振り下ろされた黒髪男の渾身の一発は、ラディスラスに届くこと

なく宙で止まった。

「・・・は・・・？」

ぴしゃりと飛び散った温かい何かに、快斗はそつと手を伸ばす。頬を濡らす鉄の匂い。錆ようにつんとしたあの匂いは快斗が苦手なあの匂いだった。

ごとんと快斗の足元に転がったのは、男の腹部から上の上体。数センチ下に切断された下肢が無残に横たわっている。

床にぶちまけられた臓器。その背からのぞくのは明らかに生の背骨に違い無い。

悪夢のような恐ろしい光景に、快斗は胃液を噴出した。

「なん・・・で・・・たかがハーフに・・・？」

転がった黒髪の男の首がそう溢したのを最期に、男の身体は上半身と下半身が離れたままぴくりとも動かなくなった。

「ちょ・・・、ちょっと、あんた一体なんなのよ・・・？ ただのハーフじゃないわね・・・！？」

マールウという赤髪の男は、悔しげに唇を噛み締め、叫んだ。すつくと軽やかに起き上がったラディスラスの顔や腕はぼろぼろに痛めつけられ、生きているのが不思議な程の有様になっていた。

「ヴァ、ヴァレンタイン・・・、お前・・・！」

快斗口にした名前を聞いた瞬間、マールウの表情がさつと色を失くした。

「あ、あんた、まさか・・・！」

ちいつと舌打ちすると、ラディスラスはマールウに飛び掛った。

だが、スピードではマールウが上回っていたようで、寸でのところで、避けられたラディスラスは、すぐさま体勢を整え、再びマールウに向き直った。

「ふつ、まさかこんなところで純血統であるヴァレンティン家の末裔をお目にかかれるなんてね・・・」

驚きの含まれたマールウの笑みに、ラディスラスは不機嫌そうな視線をやった。

「あんたの首を持って帰ったら、うちの親は泣いて喜ぶでしょうね・・・」

にやりと不敵な笑みを浮かべ、マールウが第二のラディスラスの攻撃を難なくかわした。

「どつという訳か、今のあんたはハーフの姿をしている上、その分力も格段に弱いし？」

快斗の目から見ていても、ラディスラスとマールウの力の差は歴然としていた。

ラディスラスの動きは十分に化け物染みている。が、しかし、それ以上にマールウの動きは人間である快斗の目では到底追うことのできないスピードであった。ましてや、ぼろぼろに近いラディスラスに到底敵う筈も無い。

マールウの反撃が始まった。

快斗の耳には、ラディスラスが物というものにぶつかったであろう衝撃音だけが聞こえるのみ。

もう、今ここで何が起きているのかも理解できなかった。

ただ、ここは通常の光景では無い。あの学校一優等生なラディスラス・ヴァレンティンが、一体何者なのかという疑問が頭を通り過ぎ、そしてその彼が今とんでもない事態に陥っているということだけが唯一理解できたことだ。そして、そのとんでも無い事態に陥っているのは、彼だけではなく、自分も同じだということを。

凄まじい音とともに、古い石天井が崩れ、教会内に土埃と瓦礫の雨を降らせた。

快斗はその巻き添えを食わないよう、部屋の隅でじっと様子を見守るしかできなかった。

（一体、何が起こってる・・・？ ヴァレンティンは・・・？）
兎に角今は、彼が何者であってもいい。この間の一件で腹立ちを覚えていたことはもう水に流してもいいとまで快斗は思った。ただ、最悪の事態にならないことだけを祈って・・・。

「ぎゃっ！」

劈くような悲鳴とともに、ぼてりと何かが近く of 形を失った椅子の破片の上に転がった。

手。

？ げた手が転がっている。

まさに異常な光景・・・。

これがただの悪夢ならばいいと、快斗がどれ程願ったか・・・。

「フウフウフウ・・・」

荒い息で崩れた天井の瓦礫の上に舞い降りたのは、左腕を失ったマールウだった。

そしてそこから少し離れたところに、ラディスラスの背。
彼は奇跡的に生きていた。

「あ、あんた、マジで一体なんなの・・・？ ウソでしょ・・・？
」

呆然としたようなマールウの声に、快斗は思わずラディスラスを見つめた。

さっき、あれ程のダメージを受けていたボロボロの状態だったに

も関わらず、彼は先程よりも寧ろぴんぴんした様子でそこに立っていた。碎けていただろう骨なども、まるで何も無かったかのように回復していい、今や傷一つ見当たらない。

「血清の効果もちょうど切れかかっている。タイムオーバーだ」

そう呟いた瞬間、ラディスラスの姿が忽然とその場から消えた。

「！！！」

マーロウの身体が床に強く叩きつけられ、その衝撃で瓦礫の破片が無数に飛び散った。

ラディスラスが今、倒れたマーロウの頭に手を伸ばそうとしている。

「ヴァレンタイン・・・！！」

快斗は息をするのも忘れてる程瞬間的に、自らの身体が無意識に動き出していたことに気付かなかった。

腹部に強い衝撃を受けた直後、ぐるりと視界が一回転するのがやけにゆっくりと見えた。

固い床に背中から強く叩きつけられる直前、快斗は自らの腹部に触れた指にぬるりとした嫌な触感を感じていた。

自分がどうして、咄嗟にこうした行動に出してしまったのか、快斗自身にもわかっていなかった。

ただ、上体を切断されて死んだ筈のもう一人の男の身体が、どうした訳か元に戻った上に突如飛び起き、背を向けたラディスラスに向かって襲い掛かっていくのを目の前にして、じっとしていられなかったのかもしれない。

ぽつかりと空いた天井を見つめながら、いつの間にか雨が降り出していたことを知った快斗は、遠ざかる意識の中で、僅かに男とマ

「ロウの悲鳴を聞いていた。

その直後、すっかり静かになった教会の中で、一つの足音が近付いてくる。

「なぜ僕を庇った」

ラディスラス・ヴァレンタイン。

狂い始めた歯車は、既にこの時、動き始めていたのだ。

(3) ヴァレンタイン一族の事情

血清の効果ですっかり鼻の効かなくなっているケイティーにも、その辺りに充満する血の匂いははつきりと感じ取れていた。

異変を感じ、大急ぎで戻ってきた自分達の隠れ家は、あまりに悲惨な状態へと変貌していた。

「・・・嘘でしょっ・・・！」

ケイティーの可憐な姿には不似合いな野兎のぐったりした亡骸を、ぼとりと手から滑らせた。それは、血清の効果が切れ始めたラディスラスの食生活が変化し始めたのを知ったケイティーが、彼の今夜の食卓用に取り敢えず獲得してきた獲物だった。

雨足はまだ治まりそうにもなく、深夜の空は灰色ずしりと曇ったままだ。

打ち付ける雨は、破壊された教会の屋根に容赦なく叩きつけている。

「ラディッ！！」

飛び込んだ古びた教会内。

ますます鉄臭い血の匂いがきつくなったその空間の傾いた十字架すぐ下で、ラディスラスがぼろぼろになってしまった衣服で俯いたまま屈み込んでいた。

(まさか、奴らにこの居場所を知られた・・・！？)

が、周囲にバラバラに切断された何者かの身体の各部位を認め、取り敢えずは今ここでの脅威は去ったとケイティーは判断に至った。しかし、当のラディスラスは蹲ったまま一向に立ち上がる気配は無い。

「ラディ・・・？」

ケイティーは、彼がどこか具合が悪いのではないかと心配になり、慌てて駆けつける。

「ラディ・・・、一体ここで何があったの・・・？」

彼の足元に横たわった見覚えのある青年は、あの日本からの留学生、大見快斗だったのだ。

東洋出身の彼の顔はいつになく青ざめ、ぴくりとも動かない。腹部の出血の量から、それが致死量だということもケイティーには理解できた。どう見ても、ここで彼が何らかのいざこざに巻き込まれたとしか考えられない。

けれど、そんな彼の腹部のえぐられた傷が、みるみる塞がってゆくのを、ケイティーは見逃さなかった。

何も答えないラディスラス。それでもケイティーは、彼がやったであろう事がある程度解釈できたのだった。

「・・・貴族院できつく制限されてた筈でしょ」

溜息をつき、ケイティーはラディスラスのすぐ隣に腰を下ろした。

「こうでもしなければ、死んでいた」

「ええ、そうでしょうね。でも、これじゃ、死んだも同じじゃない。寧ろ、死んでいた方が彼にとっては幸せだったかも」

じつとケイティーの目を見つめ、ラディスラスはそのまま黙り込んでしまう。

「けど・・・、あなたは彼を必要としたのね？」

ラディスラスの手は血に塗れ、黙ったままその手の滑りを、ペロりと舐めとってしまった様子から、その血が彼本人のものでは無く、快斗のものだったということが解された。

「僕がこんな無能そうな奴を？ ケイティー、君はとうとう頭がおかしくなったか・・・が、まあ血の味は悪くは無い」

ケイティーはあと大きく溜息をつく、そんなラディスラスの横顔にちらりと視線をやった。

「何言ってるの、ラディつてば。ほんと素直じゃないんだから・・・。
。あなたが自分の血を分け与えるなんて、余程のことじゃない」

そう溢したケイティーの声のすぐ下で、快斗に異変が起こりだした。真っ青になって死んだように動かなかった青年の身体が、ごほごほと苦しそうに咳き込み始めたのだ。

ケイティーが心配そうに快斗の顔を覗き込む。

「かはっ、ごほごほっ・・・」

しばらく呼吸をしていなかったかのように、突然気管に酸素が流れ入ってきた感覚に驚き、快斗涙で滲む視界をうつすら開いた。それはまるで、子どもの頃にプールで溺れた後に水面に浮上したときの感覚にひどく似通っていた。

「よかった、生きてみたい」

「さっき、君は確か死んでいた方がこいつにとって良かったと言わなかったか？」

何食わぬ顔で快斗を見下ろしながらラディスラスが棘を飛ばした。
「・・・兎に角、このままじゃどう考えても不味いわ。彼を別の場所へ移しましょう。それと、ここの後始末も・・・」

身体がひどく重く、手足がまるで石臼にでも縛りつけられているような感覚に、快斗はかろうじて目蓋を開いた。

薄暗く埃っぽい木づくりの天井に、ぼんやりと黄色い裸電球が一つぶら下っていた。

（ここは・・・？ 俺は死んだ・・・??）

快斗は、先程の信じられないような惨状が目には焼きついていた。

赤い目の男達に殺されかけ、逃げ込んだ古い教会。とても人間では考えられないような速さで移動を繰り返す二人の男達。光る鋭い牙（あいつら、一体何者だったんだ・・・？　ってか、あいつらはあの後どうなった・・・？）

ふと、あの時確かに教会内で見たクラスメイト、ラディスラス・ヴァレンタインのことが記憶に蘇ってきた。もともと、トイレで会ったときから何か隠しているとは思っていた快斗だったが、教会で見た彼の動きは、あまりに人間離れしすぎたものだったのだ。

（あいつ、何なんだ！？）

パチリと大きく瞬きした瞬間、「あっ」という可愛らしい声が近くから降ってきた。

飛び跳ねそうになったが、生憎快斗の身体は石臼に縛りつけられている程重く、びくとも動きはしなかった。

「ラディ、カイトが目覚ましたわ！！」

聞き覚えのあるその声は、間違いなくあのリディストン校のマドンナ的存在、ケイティー・マクレーンのものだったのだ。

快斗はなぜ彼女が近くににいるのかと混乱したと同時に、ましてや、自分が今一体どこにいるのかという疑問が浮かび上がってきた。心配そうな表情を浮かべながら、ケイティーが快斗を近くから覗き込んでいた。

何か口に出そうと試みるが、僅かに唇が震えた低程度に終わり、

快斗の声が発されることはなかった。

「大丈夫よ、ここは安全だから」

快斗の気持ちを解したのか、ケイティーが彼を安心させる為に笑みを浮かべて、彼の肩に優しく触れた。

「今はじつとして。あなた、血が足りないの」

死んだ筈の自分がどうして生きているのか。腹部に致命的な怪我を負っていたのは確かだったというのに・・・。

状況が飲み込めず、唯一動かすことのできる目をゆっくりと動かし、埃っぽい部屋の中に視線を走らせる。狭いであろう部屋に置いてる一脚の丸椅子に、何食わぬ顔で腕組みしながら腰掛けるラディスラスの姿が見えた。

(!!!)

驚きで目を丸くする快斗の様子に、ケイティーが全てを悟ったかのように、小さく溜息を溢した。

「ラディ、さあ説明して。あなたはわたしとカイトに状況を説明する義務があると思わない？」

椅子に腰掛けたままのラディスラスの眼は、あの襲い掛かってきた二人と同様赤い色味を帯びている。

それに気付いたとき、快斗は何やら嫌な予感がした。

「そもそも、原因をつくったのはお前なんだ、カイト・オオミ。お前がああ教会へ逃げ込んで来たせいで、あいつらに僕が存在を知られた」

ケイティーが猫のような大きな目を、僅かに細めた。

「それってつまり……」

「あいつら二人がどこの一族の出身かまではわからないが、一族に僕が存在を伝えられる前に息の根を止める必要があった」

快斗は未だ全く話の流れの掴めないまま、時折光るラディスラスの紅い目をどぎまぎしながら見つめるしかなかった。

「で、あの二人を葬ったって訳か。良かった、まだ外部にはわたし達がここに隠れてるってことは洩れて無いのね」

そう言ったケイティーの安堵の表情とは裏腹に、ラディスラスの表情は固い。

「雨が止んだら、教会全部にガソリンを撒いて燃やし、証拠を全て隠滅しなければならない。あの二人の残骸は、取り敢えずは穴を掘って埋めてある……が……。二人が戻らないことを知れば、仲間が探しにやって来るのは時間の問題だろう」

「そうね……。もうここには長居できないって訳か……」

下を向いて考え込んでしまったケイティーに、快斗は視線を移した。

（一族……。？ ラデイスラス・ヴァレンタインの存在……。？
証拠を隠滅……。？）

とんでもなく危険なものに、自分が巻き込まれてしまったのではないかと、快斗は動かない身体で必死にラデイスラスの話を理解しようと試みる。

「……。で、カイトのことは？」

言いくそうに、ケイティーがラデイスラスに訊ねた。

少しの沈黙の後、ラデイスラスが静かに声を発した。

「カイト・オオミ、よく聞いておけ。」

お前はあのとき、二人のうちの一人の死に損ないの攻撃を受け、死にかけていた。あのまま放置しておくこともできたが、お前に僕は選択の余地を与えてやった。主従の血約を結ぶかどうかと。お前はイエスと答えた。だから僕はお前を生かす為に僕の血を分け与えた。たったそれだけのことだ」

快斗の背に、何かぞくりとしたものが走ったような気がした。

確かに、あれ程の怪我をしたにも関わらず、痛みは全くと言っていい程無かった。

（主従の血約……。？ 一体どういうことだよ……。？）

本当なら、声に出して今すぐにラデイスラスに問い質したいところだったが、生憎今の快斗は少しも声を出すことはできない。

「今から話すことを落ち着いて聞いてね、カイト。ラディ、今の説明じゃカイトは何一つ理解できないと思うわ」

説明の足りなさを指摘すると、今度はケイティーがカイトに向き直って話始めた。

「まず初めに、わたし達一族の話をしなければならぬ……」

わたし達一族は、簡単に言うと、移民。あなたたち人間が原住民だとすれば、その昔にこの地球にやってきた移民なの・・・」

今から何世紀も昔、人類がまだそれ程発展していなかった時代のこと。とある森の中に、一つの宇宙船が不時着した。

「ここはどこだ・・・!？」

煙の充満する船の中から、次々に乗っていた者達が降りてきた。「生き残ったのは、たったこれだけか・・・？」

一人の男が、呻くようにそう自問した。もともと数百人は乗っていた筈の船だったが、ここに自分の足で降りたったのは、たったの七人のみ。その中には、まだ幼い小さな少年さえ交じっていた。

「よかった、この子は無事だったか」

ひどく弱ってはいたが、中の優しそうな一人の男がほっとしたように子どもの頭を撫でた。

長い金の髪を束ねた歳若い男だ。人間でいえば、まだ二十代後半程。この男の名は、グレンヴィル・ウォレス。ウォレス家の嫡男であった。

「当然じゃ。この子だけは絶対に失う訳にはいかぬのじゃ。我種族の貴重な純血統の子なのじゃ」

少年を守るように立つのは、この中では最年長の翁。ブルータス・ラザフォード。ラザフォード家の一番の古株である。

「おい、カーティス。君、自分の食糧を削ってこの子を命掛けで守つたろ？ 見直したよ」

グレンヴィルがぼんと肩を叩いたのは、利口でいかにも真面目そうな男、カーティス・マクレーンだった。こちらはマクレーン家の

三男。生き残ったのはどうやら三人兄弟のうち彼のみらしい。

「お兄ちゃん、ありがとう」

幼い少年が、カーティスに駆け寄り、ぎゅっとその足に抱きついた。彼なりの感謝の意だった。

「いいんだよ、君のお父さんに、わたし達は君を守ると約束したんだ」

カーティスが、優しく少年の黒に近い髪を撫でた。

この少年の名は、ラディスラス・ヴァレンタイン。もっとも正当な血筋の一族の一つである、ヴァレンタイン家に生まれた、純血の子どもである。実質、この子の父親が一番種族の頂点に近い地位にあつたのは誰もが知る事実であつた。

「我らの王が滅びたとなれば、この子がそれを受け継ぐことになる・・・という訳か・・・」

グレンヴィルがそう呟いた直後、低い声が響く。

「それは聞き捨てならぬな」

漆黒の髪に、不機嫌な細い目をグレンヴィルに向ける男。この男は、シーヴァー・ブラックバーン。ブラックバーン家の跡継ぎとしての権利を獲得したばかりのシーヴァーだったが、それより以前に実父の突然死や、長男の失踪等、彼の周囲には常に妙なものが付き纏っている。少なくとも、グレンヴィル、カーティス、ブルータスは厄介な男が生き残ったものだとか心の中で感じていた。

「血統で言うならば、我ブラックバーン家の血も純血。その子どもに引けを取らぬのではないか？」

彼の言うように、確かにブラックバーン家の血筋は貴重な純血統の一族ではあつた。が、彼の祖父にあたる人物が、大罪を起こしたことにより、実質この一族の者は政権の一切を剥奪されていたのだ。しかし、君には・・・」

そうグレンヴィルが口を挟もうとしたとき、

「そうよ。わたくしたちの種族は、住む星を失くしたのよ。滅びたも同然の政権に、もうなんの権限もありはしないわ。これからは強

い者が長となり統治する権利を得る。そうすべきじゃないかしら？」
強い口調で割り入ってきたのは、ドロシア・セヴァリー。生き残った中で唯一の女性であり、セヴァリー家の一人娘であった。

「こんなときだからこそ、同じ種族同士力を合わせていかなければならないんじゃないか？　見てみる、生き残ったのは、このたった七人だけだぞ」

ふんつと鼻で笑う声がして、木の根に腰掛けて白けた様子でしばらくのやり取りを観察していただろう男を、その場の皆が振り返った。

「力を合わせるだって？　笑わせんじゃないやねえぜ」

血気盛んな年頃であろうこの青年の名は、ジীগフリード・ドラクレア。ドラクレア家の中でも、この青年は要注意人物で、一族並びに他の家からもうしようもない不良と疎まれていた存在だった。けつと唾を吐き捨てると、ジীগフリードは口元を歪ませて立ち上がった。

「馬鹿みてえな馴れ合いは御免だぜ。俺は俺の好きなようにさせて貰う。幸い、ここでは食糧には困らねえみてえだしな」

そう言つてその場を立ち去ろうとするジীগフリードに、最年長のブルータスが長く伸びた白い髭を震わせ、嗜めた。

「待ちなさい、ジীগフリード！　勝手な真似は許さんぞ！　ここはまだ未知の星じゃ、我々の存在がここの生物系にどのような影響を及ぼすかもわからぬのに！」

「うつせえんだよ、クソジジイが。次に俺にむかつ腹立つこと口出ししてみろ、その弛んだ皺だらけの皮を引ん剥いてやるから」

そう吐き捨て、鋭い眼光を飛ばしながらジীগフリードは暗い森の奥へと消えた。

「……ただの頭のイカれた馬鹿だと思っていたが、あの小僧もなかなかまともなことを言うではないか」

シーヴァーが面白そうにそう呟いた。

「何だと!？」

グレンヴィルがシーヴァーを睨みつける。

「わたしも彼と同意見だ。わたしはわたしで好きにさせていただくことにする。君達はせいぜい、その坊やを脅威から守ってやるというだろう」

グレンヴィルが彼を止めるよりも前に、シーヴァーも同じく森の奥へと姿を消してしまった。

「なんという・・・」

ブルータスが嘆く瞬間、もう一人が追い討ちをかけた。

「わたくしも、シーヴァー・ブラックバーンに続かせて貰うわ。もう長いこと食事をしてないわ。喉の渇きも限界なのよ。それに、今からこの星がわたくしたちの新しい住処なの。何もかも、一からやり直しよ。わたくしはわたくしで、きっと自らの力でのし上がってみせるわ!」

気の強い笑みを浮かべ、ドロシアもその場をあとにした。

「大丈夫、わたし達は絶対に君を裏切ったりはしません。きっと君を一族の王にしてみせますよ」

不安そうに、三人の同志が消えた森の奥を見つめる幼いラディスラス少年の額に、カーティスは小さくキスを落とす。

「そうだ、俺は純血統の生き残りである君を主君に選んだ。この命尽きるまで、ヴァレンタイン家に仕えると俺も誓うよ」

グレンヴィルがラディスラス少年の前に跪き、今度はその手の甲に口付けた。

「頼もしいぞ、若造どもよ。この老いばれブルータス・ラザフォード、力の限りお前達に手を貸そうではないか」

「こうして、わたし達の種族はこの地球という血に降り立ったの」
ケイティーの途轍もなく壮大で、到底信じられないような話に、
快斗は戸惑ったように彼女を見返した。

（何世紀も前・・・？ でも、今この話にラデイスラス・ヴァレン
タインの名が登場しなかったか！？）

「付け足しておく、わたしはカーティス・マクレーンの娘で、レ
イモンドはグレンヴィル・ウォレスの息子ってことになるんだけど、
この話はまた今度ゆっくり話すわね」

今、快斗の頭はひどく混乱していた。

目の前にいる憧れの人は、つまりは人間では無いということにな
り、そしてそこにいるラデイスラス・ヴァレンタインでさえ、年齢
に換算すると恐ろしいことになるということだった。

「僕らの身体とお前達人間の身体の基本構造はほぼ同じだが、決定
的に違うものがある。血液だ」

ラデイスラスが助け舟を出した。

「僕達一族の寿命は極めて長く、そしてその治癒力は人間とは比べ
物にならない。それは、血中に含まれるナノマシンのせいだ」

”ナノマシン”とう聞き覚えのある言葉に、快斗がぱちぱちと瞬
きを繰り返す。

（ナノ・・・マシン・・・？ あの某SFドラマなんかに出てくる
あれか！？）

その反応に應えるように、ラデイスラスは続けた。

「我ヴァンスハイアー人は多種族に比べ出生率が著しく低く、その
せいで種族の絶滅を防ぐ為に一人の寿命を長く保つことを必要とし
ていた。そこで、生まれてすぐにナノマシンを血液中に注入するこ
とで、あらゆる病気や怪我からその身体の主を救うことに成功した」

ナノマシンはあまりに完璧だった。ナノマシンはやがて自ら進化を始め、血中の成分を新たな材料とみなし、増殖。もともとは老化していく筈の細胞でさえ、新しく作り変えることまで可能にしていたのだった。

やがて、ヴァンスハイアー人は、自然の摂理から外れた異端な存在に変わってしまった。永久不滅の存在となってしまったのだ。

ところが、いくら不滅の存在である彼らであっても、食糧難には手も足も出なかった。彼らの主食は、主に血液。ナノマシンの注入により、食事情もすっかり変貌してしまったのだ。

その食糧難を受けて、その後ナノマシンの製造は禁止されることになったのだが、そのことが原因し惑星内部でナノマシンと食糧となる血を巡って激しい争いが勃発していったのだ。

ヴァンスハイアー王たる者は殺され、力と財力のある者だけが星を逃げ出した。それがあの宇宙船である。

船内では餓死者が続出。定期的に一定の血液を接種しなければ、血中のナノマシンが自己の血液をもエネルギーとして消費しつくしてゆく。言うなれば、干からびて死んでしまうという訳だ。そうした過酷な中で、生き残ったのが、例の七人だった。

「簡単に言えば、お前の傷口から僕の血液を流し込んだ。正確に言えば、”ナノマシン”を流し込んだということだ」

ラディスラスの恐ろしい告白に、快斗は思わず叫び出したかった。「昔、ある人間が、ヴァンスハイアー人の名に因んで、私たちをヴァンパイアと呼んだ。それがきっかけで、わたし達は人間達の間でそう広く呼ばれるようになったの」

”ヴァンパイア”それは、早く寝ない子どもを怖がらせる為に誰かが創り上げた想像上の生き物の筈だった。人はそれをときに吸血鬼とも呼ぶ。

（・・・俺は化け物になったのか！？ 一体なんてことしてくれた

！！！！）

・・・と。

怒りで震える快斗の目に、怒りの涙が滲む。

ケイティーがひどく悲しそうに快斗の肩を静かに擦った。

「あなたが怒るのは無理も無いわ。でも、わかって、ああしなきゃあなたは死んでた。ラディはカイトを助けたかったのよ」

そんなケイティーの慰めも耳に入らない程、快斗は泣きたい気持ちでいっぱいになっていた。

今、自分の体内では、ラディスラスから流し込まれたナノマシンが這いずり回り、自らの血液を貪り食っていることを思うと、吐き気がした。けれど、なぜかひどい渴きも快斗は確かに感じていた。

（あのままなぜ死なせなかった・・・！ あのまま死んでいれば、苦しまずに逝けたのに・・・！ どうして俺を化け物になんか・・・！！）

もう二度と元の生活には戻れない、快斗はそう確信した。

「さっきも話したが、お前は確かに僕と血約を結んだ。僕の僕しもへにならんと、そう言つたろ。何をそんなに悲しむ必要などある？」

しれつとしたラディスラスの態度に、全く覚えのないその”血約”。もしも今自由に身体が動かせたなら、きっと快斗はラディスラスに殴りかかっていたに違いない。

（どうして俺を助けたりなんかした！？ 俺はこんな形で生き残りたいなんて無かったのに！！
どうしてなんだよ！！？？）

俺は、ふと数日前にリディストーン校のトイレでラディスラス・ヴ

アレンタインと会ったときのことを思い出した。

（ああ・・・、くそっ、なんであの時・・・）

あの時に腹痛を起こしてなどいなければ・・・。そしてあのトイレになど駆け込まなければ・・・。

ラディスラス・ヴァレンタインになど、声を掛けていなければ・・・。

もしもあの時に彼の異変に気付いていなければあるいは・・・、

と。今となってはどうすることもできない考えを繰り返すことしかできないでいた。

。けれど、全ては、なるべくしてなった結果なのかもしれない・・・。

(4) 闇の世界へ

重苦しい空気漂う中で、ラディスラスが何かを感じ取った様子で、古ぼけた一枚板の扉をしばらく見つめている。

「誰か来る・・・」

そう言った直後、勢いよく扉が開きもの凄い勢いで何かが飛び込んできた。

「ラディー！！ 無事か！？」

聞き覚えのある声に、快斗は視線だけを泳がせた。

「レイ！ 戻ったのね！」

ケイティーがどこかしらから帰還したと思われるレイモンド・ウオレスに駆け寄った。

「遅くなって悪かった。けれど、無事で何よりだ・・・。戻ってみれば隠れ家になっていた教会はあの有様だし、驚いたよ。生憎俺の血清の効果はまだ持続中で鼻は利かない上、雨で視界は悪いわで・・・」

「頭から被つてい黒いレインコートは頭から下までぐずぐずに塗れていて、外はまだかなりの雨に見舞われていることが明らかだった。」「じゃあ、どうやってこの小屋に？」

不思議そうに首を傾げたケイティーに、ラディスラスがレイモンドの代わりに答えた。

「どうやら来客のようだ」

きょとんと扉を振り返ると、扉がゆっくりと開き、レイモンドと同じく真っ黒いレインコートの人物が姿を現した。快斗の位置からは顔と性別までは判断できない。

ぼたぼたと雨の雫を垂らし、その人物がレインコートのフードを外したと同時に、それが男性であるということが判明した。

「やあ、久しぶりだね、元気にしてたかい？」

赤い目に白い顔。明らかにその人物が人間でなく、ラディスラスやケイティーと同種であることから、世間で言われる”ヴァンパイア”の一人だと判別できる。しかし、ラディスラスやケイティーの落ち着いた様子から、その人物が脅威ではないことは確かであった。「グ、グレンヴィルおじ様！？　どうしてここに！！」

ケイティーが予想外の人物の登場に、驚きの声を上げた。

「やあやあケイティー、しばらく会わないうちにまた磨きがかかったかな？　おじさん会いたかったよ」

ヴァンパイアらしからぬ親馬鹿を発揮しながら、濡れたレインコートのままケイティーに抱きつこうとするこの男に、ラディスラスの投げた小瓶がゴンと音を立てて男の頭に命中する。

「ぐがつ」

男の呻き声の後、ごろんごろんと床に転がる小瓶の悲しげな音。

「馬鹿はよせ、グレンヴィル。ケイティーは今血清の効果でただの人間と変わらないんだぞ。そんな馬鹿力で抱きつけば死んでしまう間抜けも大概にしるよ」

淡淡としたラディスラスの声に、「ん？」と反応し、今度はラディスラスに向き直り、抱擁の意を示し駆け寄った。

「ラディ〜〜！！　元気だったか？？」

「気色が悪い！　離れる！！」

抱きつこうとするグレンヴィルの額を右足の靴底でぐいぐいと突っ張るラディスラス。この男の登場で、一気に先程までの重い空気が吹き飛んだと言っても過言ではないだろう。

「ひどいな、ラディ。以前は『グレンヴィルお兄ちゃん、大好き』って言うてくれていたのに・・・」

抱擁を拒否されたことにすっかりいじめてしまったグレンヴィルは、がっくりと膝をついた。

「どれ程昔だ！！　それは何世紀も前のことだろうが！」

すっかり男のペースに巻き込まれてしまっているラディスラスに、レイモンドとケイティーは顔を見合わせて微笑んでいる。

ようやく濡れたレインコートを脱ぎ、蜘蛛の巣の張った窓べの出っ張りにそれを引っ掛けるながら、レイモンドが話を切り出した。「貴族院の使者と落ち合った帰り、ロンドンの街中の思わぬところで父さんとはったり出くわしたんだ。ちょうどこちらへ別の用事でやって来ていたらいいんだけど、事情を話したら力を貸してくれることになって」

椅子に腰掛けたまま、ラディスラスが頷いた。

「なるほど、それでこんなところまでわざわざ。で、教会の有様を見て、この山小屋まで僕達の匂いを追って来たってところか」

「まあ、そういうところかな」

レイモンドが肩を竦める。

「しかし、これは一体どういうことだ、ラディ。なぜあいうことになった・・・？ もしや、奴らにこここの居場所を知られたのか？」

グレンヴィルの質問に、ケイティーがふるふると首を横に振った。「まだ奴らにはわたし達の居場所は知られていないわ。けれど、知られるのは時間の問題かもしれない。わたし達には、もう身を隠す為の血清も残されていないし・・・」

グレンヴィルは、埃っぽい部屋の床に腰を下ろすのを嫌がったのか、落ち着かない様子でうろつくと部屋の中を歩き回り始めた。

「ただ、この雨は不幸中の幸いだった。雨は匂いも全部洗い流してくれる。雨が上がれば、きっと匂いの心配は無いだろう。・・・が、一夜にして元あった教会がぶっ壊れていたとなれば、周囲の人間達が騒ぎ始めるだろうな」

こくりとラディスラスが頷く。

「雨が止めば、燃やして後処理を済ませる。キャンドルの火の不始末と装って火事を起こせばいい」

レイモンドが、「後で俺がやっておくよ」と付け足した。

「それともう一つ・・・、妙に引くかかることがある・・・」

ラディスラスの珍しく訝しげな表情に、グレンヴィルもレイモンドもケイティーも、彼に視線をやった。

「何がだい？」

グレンヴィルがそう聞き返したしばらく後に、ラディスラスがじつと赤い目を細め呟いた。

「教会に押し入ってきたあの二人・・・、どう見ても下っ端に違い無いのに、ハーフでは無かった」

レイモンドが、脱いだレインコートをグレンヴィルと同じように窓辺の出っ張りに引っ掛けると、首を傾げた。

「それはおかしいな・・・。彼らは本当に完全体だったのか？ 君の見間違えじゃ・・・」

「僕が見間違える？ 冗談もほどほどにしろ、レイ」

機嫌を損ねたラディスラスは、不機嫌なまま続けた。

「あれは確かに完全体だ。あのパワー、間違いない。回復もハーフでは在り得ない程の速さだった」

それを聞いたグレンヴィルが、うむと一つ声を溢した。

「・・・となると、嫌な予感がするぞ。傷口からの血液分与ではどう頑張っても人間をハーフにしか作り変えることはできない。どっかの馬鹿一族が、ナノマシンの製造の掟を破り、直接体内に注入しているとしたら考えられない」

ヴァンパイア界にとっては、相当不味い状況らしく、三人の顔色が強張る。

今度は腕組みしながらうろつろと歩き回るグレンヴィルに、ケイティーが口を挟む。

「おじ様、なんだか落ち着かないわ。座ってくださいらない？」

一瞬ぴたりと動きを止めたグレンヴィルだったが、床の埃をじつと見つめた後、それは受け入れられなかったのだらう、何も無かったかのように、近くの壁に静かにもたれ掛かった。

「・・・ところで、ラディ。なんだか体調が優れないように見えるが・・・？」

そしてそう言った視線の先は、先程から気になって仕方の無かつ

たベッドに横たわる青年の姿に向けられている。

「そうなの、おじ様。ラディったら、瀕死だった彼を助けようと血を分け与えてしまったのよ」

助けを求めるかのように、ケイティーが心配そうな目を、未だ動かないまま横たわる快斗に向けた。

「ラディが彼を助ける為に・・・？」

驚いた表情で聞き返したグレンヴィルに、こくりとケイティーは肯定の頷きを返した。

ばつが悪そうな顔をして、そっぽを向いてしまったラディスラスに、グレンヴィルとレイモンドが、珍しいものでも見たかのように互いに顔を見合わせた。

「なるほど・・・。それじゃ二人とも早いところ血液を接種した方がいい。二人が干からびてしまう前に」

どういう経過でこうなったのかを聞くようなことはせず、グレンヴィルは静かに小屋の扉まで歩いて行く。

「ちょうど、手土産にいいものを持ってきたんだよ。レイモンドから、ラディがそろそろ渴きを訴え始めている頃だって聞いていたもんだからね」

扉を全開にすると、小屋のすぐ入り口の辺りに置いてあった何かをずるずると引き摺り入ってきた。

「し、鹿！？」

「そうだよ、ケイティー、おじさんすごいだろ！ 来るときにたまに偶然見つけちゃってね、ついでにちよこつと捕まえてさ」

親馬鹿ならぬ、おじ馬鹿炸裂のグレンヴィルを差し置いて、ケイティーがどこからか万能ナイフを取り出して死んで間もない鹿の喉に突き立てた。

「おじ様、何か器になるものー！」

こういうときの為に、いくつか持ち歩いているゴム製の水入れをさつと差し出すと、ごぼごぼと溢れる鹿の血液を慣れた手つきで次

々に集め入れていく。

小屋の中に充満する鹿の血の匂い。

以前の快斗ならば、この匂いを嗅いただけで吐き気を催していた筈だった。

けれど、どういう訳か、嫌悪感はなくと言っていい程湧いてはこず、寧ろ早く自らの渴いた喉を潤おしたい、この渴きと石臼のように重く苦しい状態から解放されたい、と願っている自分がいた。

「さ、ラディ。飲んで。こんな動物の血でも、飲まないよりは少しは力がつくわ」

ラディスラスは、水入れにたつぷりと血の入ったまだ温かみのある鹿の血をケイティーから受け取ると、無言のままそれを口にした。あつという間に飲み干してゆく様子を、快斗は信じられないものでも見るかのように、じっと見つめた。

（・・・まじかよ・・・。ってか、本当は中にただの水が入ってたってるんじゃないよな？）

すぐ近くで事の成り行きを見ていた癖に、快斗は彼の飲んでいるものが血であつて欲しくないと強く願っていた。

けれど、彼の口を伝ってぽたぽたと垂れたのは、あの黒く赤い血。それは、水などではない、本当の血液であつた。

（本物のヴァンパイア・・・）

呆然としてそれを見つめる横で、ケイティーがゆっくりと快斗に近付いて来る。

「カイト、今度はあなたの番よ」

ちやぷちやぷと音を立てて、彼女の手の中の水入れが快斗の口元へと誘われる。

近付くにつれてきつくなる血の独特の匂い。

身体は確かに血を欲している。けれど、快斗の目には、血を水やジュースのように勢いよく飲み干してゆく、ラディスラスの人間離れした妖しい姿が焼きついて離れない。

（いやだ・・・、俺は飲みたくない・・・。化け物になんてなりたくない！！）

口をぎゅっと嚙み、快斗は動かない身体で懸命にそれを拒む。

唇を緩めてしまえば、なぜかもう取り返しがつかないような気がしてならなかった。

「お願い、口を開けて。でないと、あなた本当に死んでしまうわ・・・」

悲しい顔をして、ケイティーが快斗の唇にそっと水入れの口を押し当てた。

けれど、固く閉じられた唇から、血は入ることなくつうと流れ、快斗の胸の辺りに次々とグロテスクな血染みを作ってゆく。

快斗はじつと堪えた。化け物に成り下がってしまう位なら、ここで干からびて死んでしまっても構わない。そう思った。

「カイト、お願いよ。これを飲んでも、誰もあなたを責め立てたりなんかしないから」

ケイティーがなんとか快斗に飲ませようと奮闘するが、ぎゅっと目と唇を閉じたままの快斗に、一滴の血も飲ませることができないでいた。

「いい加減にしろ、さっさと飲め。言っておくが、干からびて死ぬと簡単に言うが、どれだけの渴きと苦しみを味わうのかを知らないだろう。体内のナノマシンが血液を欲し、血液増産を目的に体内の内臓や機能の全てをフルに稼働させようとする。そうすると、まず始めに内臓のあちこちが一度に炎症を引き起こし、膨張。それを修復しようと、ナノマシンがまた血液を消費する。これが三日三晩続き、三日後の朝にはカラカラに渴いた骨と皮だけの姿になって死ぬんだ」

恐ろしいラディスラスの忠告に、快斗は震え上がった。

そんな死に方をするくらいなら、あのとき、楽に死んでいたかった、と。

「そうだ、今はまだ受け入れられないかもしれないが、今は生き延びることだけを考えろ。どんな形であれ、君はもう、俺たちの同志なのだから」

グレンヴィルが優しい口調でそう言った。

「カイト、飲むべきだ。君の身体はあまりいい状態とは言えないみたいだ・・・」

レイモンドが困ったように後押しする。

もう一度ケイティーが水入れの口を快斗の唇に宛がうが、彼は一向にそれを飲もうとうはしない。

「・・・君の精神力には恐れ入るばかりだよ、カイト。けれど、君のやせ我慢は賢明ではないな。体内の血液を多量に失った際に、出る一つ目の症状が目眩。その次の症状が身体の麻痺・・・。その次が内臓、及び皮膚組織の急激な乾燥が始まる。そして、君の今の状態がまさに危険値が第二期に達していると推測される。そんな状態で目の前に血を差し出されて、理性を保つことのできる者がいるとは・・・」

ヴァンパイアとして生存してきたグレンヴィルやラディスラス達にとって、快斗の強い精神力には驚かされるものがった。

「ほんと・・・。これが日本の”大和魂”ってやつなのかな？」

レイモンドの感心の一声は、生と死の間で自我を守り続けようと懸命な快斗に対してあまりに軽口が過ぎた為に、ケイティーが強い視線でレイモンドを睥睨した。

「それ程の強い精神力を兼ね備えているんだ。君をここで失うのはあまりに惜しい。」

ラディスラスの血を無駄にしない為に、どうか今はその血を飲んでくれないか」

ゆっくりベッドの脇に歩み寄ってきたことで、快斗は初めてグレンヴィルの顔を拝むことができた。

レイモンドと同じ金の髪。レイモンドの父であり、実際は何世紀もの時代を生きてきたにしては、あまりに若い男の顔であった。人

間で言うとうとう見ても三十路手前。優しげな印象を覚えていたグレンヴィルの声だったが、反して意志の強そうな隙の無い目を持つ男だった。

ケイティーの手から水入れを受け取り、今度は自ら快斗の口元へ運ぶ。

（絶対に、飲んでたまるか・・・！）

恐ろしい程の渴きと、痛みに変わりつつある身体の重さに抗いながら、快斗はそれでも賢明に鹿の血を拒み続けた。

「貸せ」

突然ラディスラスの声がグレンヴィルの背後から割って入った。いつの間に椅子から立ち上がったのか、不機嫌なラディスラスは乱暴にグレンヴィルの手からその水入れを引ったくった。

「ラディー!?」

ケイティーとレイモンドの驚いた声よりも先に、ラディスラスが水入れを持たない空いた手で、快斗の顎を無理矢理突き上げていた。「ラディ、一体何を・・・」

グレンヴィルの静止の声を無視し、ラディスラスは力任せに抉じ開けた快斗の口腔内にどばどばとどす黒い血液を流し込む。

「・・・!!!!!!」

身動きのとれない快斗にとっては、ラディスラスに対抗する術は何もなかった。

突然流れ込んできた液体に咽返りながらも、涙ぐみながら快斗は強制的にそれを飲まざるをえなかった。

喉に直接注ぎ込まれた鹿の血は、まだ生暖かく滑らかで、そして濃厚だった。

不気味でそして何より恐怖の対象でしかなかったあの血が、まるで別の神水のようにも感じた。

「ラディスラス！」

グレンヴィルが、明らかにやりすぎているラディスラスの腕を掴み、静止させる。

その手に握られていた水入れの血液は、零れて流れ出た分も含め、ほとんど空になっていた。

「かはっ・・・」

ぴくりとも動かなかった身体がだるいながらもみるみる動くようになり、快斗は咽返りながら苦しそうに横向きになり、喉を押さえた。

「カイト、大丈夫！？」

慌てて駆け寄ったケイティーだったが、はっとして触れかけた快斗から離れた。

「・・・っで、なんで俺を助けた！！」

握り締めた拳がきつく握り締められ、小刻みに震えている。

もともとは真っ黒で澄んだ黒い瞳は、今や薄っすらと赤みを帯びていた。その胸元は、しとどに血液で濡れている。

快斗はラディスラスの胸に掴み掛かった。

「なんで俺をあのまま死なせてくれなかった・・・！　なんで・・・」

「

顔中に付着した血の痕に、次々と溢れる涙の筋がぶつかり、血の涙となつて滴り落ちてゆく。快斗の声はひどく震えていた。

「お前を助けたのに別に特に理由なんか無い。単なる暇つぶしだ。僕のように、長く生きていると楽しみというものが少ないからな」

口元をわざと引き上げ、ラディスラスはそう返答する。

「なん・・・だと？」

快斗は無意識に掴み掛かっていた手に更に力を込めた。

（俺は、こいつの気まぐれでこうなつたってことか・・・？）

思い切り殴りつけてやろうと思い、振り上げた拳だったが、それはラディスラスにぶつかるよりも前にぱたりとベッドの上に力なく落ちた。あまりの落胆で殴る気も失せ、快斗がそのままぐりと腕を落としたのだ。

「お前は僕に感謝すればいい。あんな小汚い場所で散々な死に様を晒さなくて良くなったんだ、喜べ」

快斗は涙に濡れた目でぎっとラディスラスを睨み上げた。

もともと好きではなかったが、このクラスメイトが、本当に薄情で最低な男だったと改めて感じたのだ。

「俺が感謝するって・・・？ そんな日は千年絶とうが百万年経とうが絶対に来ない・・・」

憎しみを込めた目で、カイトはラディスラスにそう言い放った。

「ラディスラス・ヴァレンタイン。俺はお前を一生許さない」

掴んでいたラディスラスの服を、はねのけるようにして突き放すと、快斗はじつと彼の赤い目を見つめてそう続けた。

「勘違いするな、カイト・オオミ。お前は僕と血約を交わした。お前はもう僕の僕しもべなんだ。

主である僕に逆らうことは許さない。お前の全ては僕の手の中にあるということをしつかりと覚えておけ」

突き放されたラディスラスは、ふんつと鼻であしらうと、つかつかと大雨の降りしきる小屋の外へと早足で出て行ってしまった。去り際の横顔が、ほんの少し辛そうな色を含ませていたことに、グレンヴィルだけは気付いていた。

「ちよつ、ラディ！ どこ行くの！？」

ケイティーが咄嗟に後ろから声をかけたが、その質問の返事は来ないままラディスラスの姿は森の薄暗がりの中に消えてしまった。

悔しそうに唇を噛み締める快斗の肩に、レイモンドがぼんと手を置いた。

「カイト、許してやってくれないか？ ラディはあの通り、俺様な性格だし素直じゃないから・・・」

こくりとケイティーが頷いた。

「そつよ気にしないで、カイト。ラディは気まぐれなんかであなたを助けたんじゃないと思うわ。だって、彼が自分の血を他人に分けるなんて何世紀も一緒に過ごして初めてのことだもの」

「そうかな？ 俺には到底そつは思えないけど・・・」

ラディスラスに対する怒りは未だ消えず、快斗は床に転がった血の付着した水入れを見つめた。

（俺は化けものだ・・・。あれだけ飲まないと決めていた鹿の血も、気づいたら無我夢中で飲み込んでた・・・）

快斗を令、ラディスラスに対する怒りよりも、すっかりと変貌してしまった自分自身への恐怖心が覆い始めていた。

「ラディは相変わらずのようだね、困ったもんだ」
グレンヴィルが肩を竦めた。

やっと訪れた僅かな沈黙に、皆が黙つたまま雨の音を聞いていた。想定外に新たに仲間に加わることになった快斗に、誰もが素直に喜べない状況にあつた。快斗の存在こそ、彼らにとっては異端な存在であるのかもしれない。

けれど、彼らは微笑んだ。

「君を歓迎するよ、カイト。ようこそ、闇の世界へ」

グレンヴィルが青白くしなやかな手を快斗に差し出す。

おそろおそろ伸ばされた快斗の手は、その上からケイティーとレ
イモンドの手にそつと優しく包まれていた。

(5) 血約

「おい、カイト見なかったか!？」

きよるきよると忙しく辺りを見渡しながら小走りで駆け寄ってくる大柄がこちらに向けて声を掛けた。

その声が一番に気付いたのは、ネイサンであった。読み耽っていたのは、英訳してある日本コミックス最新版で、眼鏡のレンズ越しに視線だけを上げ、ちらりとそちらを見やった。

「でさ、ニツクの奴、もう一週間もメールの返事を送ってこないのよ。サイテーでしょ!？」

ちやうどジェニーが何やら興奮気味にヴェラに愚痴を零しているところだった。

「ジェニー、後ろ」

ネイサンが顎でしゃくつたのを見て、初めてジェニーとヴェラがぴたりと会話を中断して後ろを振り向いた。

薄っすらと額に汗をかき、焦った表情で駆け寄ってきたのは、いつもと少し様子の違うテッドだった。

「何、どうしたの? テッド」

きよとんとした顔でヴェラが訊ねた。

「カイトを見なかったか? って」

ふるふると首を振る三人を見て、テッドが明らかに落胆の表情を浮かべた。

「カイトがどうかした?」

ジェニーの質問に、テッドが勢いに任せてテーブルに大きく手をついた。

「カイトがいねえんだ!!」

「は?」

話の筋が全く掴めない三人は、きよとんとしてテッドに視線をやった。

「カイトがいねえんだよ、お前ら見なかったか？」

顔を見合わせ、三人が首を横に振った。

「今日は休んでんじゃない？ 朝から見てないけど」

顔を青くして、テッドが昨晩の出来事を仲間達に話し始めた。

「それが、昨日の晩によ……」

深夜二十三時半。テッドは酒に寄って眠ってしまった寮長の部屋からビールの瓶をくすねることに成功し、ビール瓶片手にいそいそと快斗との待ち合わせ場所を目指していた。

約束の時間は二十三時ジャスト。時計はすでに半刻を過ぎ、いつものことながら、快斗への言い訳を考えながら、電燈も何も無い暗がりの丘を歩いていた。

「やべえな……。のんびりシャワー浴びてて遅くなったなんて言ったら、あいつ怒るだろうな……」

頭をぽりぽりと掻き、テッドはふと灰色の雲に覆われた空を見上げる。

その手にぴちりと水滴がかかり、ぱたぱたと小雨が降り始めた。

（まじやべえ……！ こりゃ急がねえと！）

今日の集会は中止しようと、テッドは空いた方の手でポケットの携帯を取り出す。快斗にダイヤルするが、電波が悪いらしく、繋がらない。

「ちっ」

本降りになる前にと、テッドは快斗を待たせてある場所へと早足で急いだ。

「カイト？ いるのか？？」

けれど、その場所には快斗の姿はどこにも無く、テッドはもう一

度携帯の画面を見る。圏外。ここでは電話をかけても彼に繋がることはない。

（なんだよ、せっかく慌てて来たつのに。先に帰っちまったのかよ、ちくしょう）

不機嫌になりながら、テッドは先程よりも明らかにきつくなりつつある雨の中、もう一度辺りを見回した。人の気配はどこにもない（しゃあねえ、帰るか……。寮に戻ったら、あいつに直接文句言つてやんねえと！　なんかで埋め合わせさせなきゃ釣り合い取れねえよ）

どう考えても、三十分以上遅刻してきたテッドに責任があるだろうに、彼は自分の行いを棚に置き、ぶんすかしながらいよいよ本降りになってきた雨の中元の道を引き返して行ったのだ。

「で、あんたが呼び出しておいて、遅刻して快斗に会えなかった訳だ？」

ははん、とヴェラが小馬鹿にしたように目を細めた。

「まあ、それはそうかもしれないけどよ、問題はそこじゃねえよ」
テッドが口を尖らせた。

「寮に戻ってすぐに、携帯から快斗に電話したけど、圏外でもねえのに通じないんだ。電池でも切れてんのかと思って、こっそりあいつの部屋の窓から忍び込んだけど、中は蛻の殻だった……。で、一夜明けてから今朝も部屋には戻ってねえし、携帯も通じねえし……。学校にも来てねえみたいだし……」

ようやくテッドの焦りの原因を理解した三人は、少し顔色を変えた。

「それ本当？」

ジェニーがテッドの腕をぐいと引っ張った。

「お、おう……。嘘だったらこんなに焦ってねーよ」

伏し目がちに、テッドが呟く。

「だよね……。ってか、あの真面目くんのカイトが、わたし達に何の連絡も寄越さないでサボるなんて天地がひっくり返ったってないだろうし……」

真剣なヴェラの言葉の後に、ネイサンが追加して訊ねた。

「ね、テッド。待ち合わせしてた場所って……」

「教会から少しいったとこのあの丘の上だよ。あそこなら、ちょっとくらい焚き火して煙があがっても、まず気付かれねえし」

読んでいた本をぱたりと閉じると、ネイサンは何かじっと考えているようだった。

「……カイトの身に何か起きたとは考えられない？」

「何か起きたって？ あんなとこ、俺達にとっちゃ庭みたいなものだぜ？」

テッドの感情的な抗議に反し、ネイサンは理論的に状況を整理しているようだった。

「でもさ、あの辺りは特に電波状況も悪いし、野生動物だって出ない訳じゃないし。もしどこかで怪我でもして、もしくは雨で足でも滑らせて動けなくなったら？ そのまま携帯も雨に濡れて使えなくなってる可能性だってある訳だ」

昨晩は天気も悪く視界も悪かったこともあって、彼の言ったことは全く否定することはできないものだった。

「……だよね……。それってさ、かなりやばくない？ もしどつかで倒れてたら早く見つけないと最悪の事態になり兼ねないよね……」

ヴェラの言葉に、ジェニーが青い顔でがたりと椅子から立ち上がった。

「ジェニー？」

ネイサンの呼びかけに応じる暇もなく、「わたし、カイトを探して来る!!!」っと、バッグを引ったくるようにして肩からかけると、

勢いよく飛び出していった。

「ちよつ、このあとの授業は！？　ねえ、ジェニーったら」

ヴェラが叫びと同時に、ネイサンとテッドも顔を見合わせる。

「僕も様子を見に行ってくるよ」

「お、俺も・・・」

大切な漫画を手に、立ち上がったネイサンの服の袖を、ヴェラが咄嗟に掴んだ。

「ちよつと待って！！　わたしも行く！！」

鹿の血を接種したことで、万全の状態では無いものの歩ける程度に回復した快斗は今、昨晚の埃臭く湿っぽい山小屋などでなく、随分小マシなモーテルのソファで、グレンヴィルの話に耳を傾けていた。

「明け方、教会の後始末はレイモンドと一緒に済ませておいた。あのどこかしらの客人二人のバラバラ死体だが、一部分を取調べように採取した後焼却。お前達がああ教会の地下にしばらく住んでいた形跡もなくしておいた・・・。問題は・・・」

明け方にやっと戻ってきたラディスラスは、快斗にはまるで何の関心も無いかのように、視線の一つもそちらに向けようとはしない。どこか張り詰めたような空気が部屋の中に漂う。

「問題は山積みだ。一つは僕らの仮住居がなくなったこと」

古びた教会は、休みの日は学生や村人がミサを受けにやってきて

はいたが、それでもあそこ地下は神父でさえ把握できておらず、身を隠すには持って来いの場所だったのだ。

「それから、あいつらの仲間が探しに来る可能性が大いにあり得るということ」

腕組みしたまま、レイモンドがこくりと頷いた。

「それに、血清の問題だ・・・」

ケイティーがはあと小さく溜息をついたのを、快斗は聞き逃さなかった。ちらりと落ち込むケイティーの整った横顔に視線をやる。

「血清がなければ、僕達が人間の振りをして人間に紛れて暮らすことは不可能だ。血清さえあれば、取り敢えずは食べるものもパンやスープなどでまかなえたが、血清が無ければそうはいかない。血を定期的に接種しなければならぬし、日中の動きはかなり制限されてしまう」

まだ考えや感覚が全く追いついていない快斗にとっては、ラディスラスが言ったことがどれだけ今の自分に痛手となるのかを、まだ理解できてはいなかった。

「そのことなんだが・・・」

グレンヴィルは持つて来ていたビジネスバッグを机の上で手繰り寄せると、ごほりとわざとらしい咳払いをして三人を見渡した。

「なんだ、焦らすような真似して」

いつもはあまり何かに興味を示さないラディスラスだったが、今回は本人も無意識のうちに、ほんの少し身を乗り出してビジネスバッグを見つめる。

「言つたら、俺は君達の役に立てるって」

ラディスラスの反応に満足したのか、満面の笑みを浮かべ、グレンヴィルが片目を閉じた。

「一体なんなの、父さん」

レイモンドがそう言いつて急かすのを、「まあまあ、ちょっと待って」と、諭しながら、グレンヴィルはゆっくりとバッグの蓋を開けていった。

「これって・・・」

ケイティーが呆けたように声を上げた。

「まさか」

レイモンドも驚いたように呟いたが、快斗にはそれが一体何なのか理解できないまま。

「そのまさかだよ」

小さな医療用の小瓶を取り出すと、トンとそれをテーブルの上に置いた。

「血清・・・？ なぜグレンヴィルがそれを持っているんだ！？」

勢いよくラデイスラスがテーブルを叩いたせいで、テーブルが弾け見事に真つ二つに落ち窪んでしまった。その拍子に小瓶が飛び上がり、宙を舞う。

「おっとと」

ひょいとそれを空中でキャッチすると、グレンヴィルは言った。

「おいおい、貴重な一瓶なんだ、大事に扱ってくれよ？」

血清の効果が切れてしまったせいで、ラデイスラスのパワーは人間の何十倍にもなっていた。ナノマシンが全身の筋肉の強化、活性化をさせ、フルに活動させているせいだとグレンヴィルは話していた。解りやすく言い換えれば、世間一般で言われる”火事場の馬鹿力”という瞬間的なパワーを、常備した状態にあるということだ。よって、今のラデイスラスは、気をつけていなければそこら中の物を破壊し尽くしてしまうことだろう。彼の場合、血清の効果でしばらく人間の力加減に慣れてしまっていたせいもあり、力のコントロールが少々麻痺しているようだ。

「グレンヴィルおじ様、どういふことが説明していただけませんか？」
ケイティーが、落ち着いた口調で訊ねる。

「まずはじめに、この血清はあくまでその場凌ぎの品だということ

を言っておくよ。君達が今まで使用していた血清とは、見た目こそ同じだが大きく違う点がある」

見たところ、透明感のあるすこしトロミのついた水といったように快斗には見えたが、これがラデイスラス達にとっても重要なものであることは確かのようにだった。

「どう違うの？」

まだ前回の血清の効果が持続しているレイモンドは、青く澄んだ青年らしい瞳をじっと凝らし、小瓶の中身を電気の光に翳して見つめる。一見しただけでは誰も彼をヴァンパイアとは気付くことはまず無いだろう。

「カーティスが救済処置として作った、通常血清の五十倍に薄めたものがこれだ。即ち、今までの効果は約二週間程度だったが、これは約六時間程度しか効果を持続できない」

レイモンドがぼそりと呟いた。

「・・・五十倍・・・。ラディは俺達よりも効きにくくなってきているから、きつと六時間も持続しないだろうな・・・」

「でも、数時間でも無いよりはずっといいわ。でしょ？」

ケイティーはにこりと笑った。

「残り少なくなっている血清を五十倍に薄めたことで、まだしばらくはなんとかその場を凌いでいる・・・。が、一刻も早く”特別な血”を探し出さなければならぬという事実是不変。でなければ、この薄めた血清さえも底をつきてしまう」

快斗は意を決したように声を発した。

「すみませんグレンヴィルさん。その、血清や”特別な血”って・・・？」

ああ、と快斗が未だ無知であったことを思い出したように、グレンヴィルが顔を上げた。

「そうだった、君にはまだ説明していなかったね」

小瓶の中身を見せながらグレンヴィルは丁寧に言った。

「この小瓶には、血清が入っている。これを注入することで、俺達

の体内で動き回るナノマシンを一時的に眠らせることができるんだ。ナノマシンが動きを止めている間、俺達は普通の人間と同じ状態に変わることができる。そうすることで、俺達はずっと人間の中に紛れて生きてきたって訳だ」

快斗にとって、この説明は驚くべき事実であり、そして天の救いのようにも思えた。

「じゃ、じゃあ、その血清があれば、俺は元の身体に戻るってこと!？」

目を瞬かせ、グレンヴィルは「まあ……。一時的とは言え、そうなるかな……。？」と返答する。

快斗はぎゅっと長いTシャツの裾を握り締めた。レイモンドに借りた服は快斗にとっては少しばかり大きすぎるようだ。ラディスラスは不機嫌に、嬉しそうな快斗から視線を逸らした。

「ぬか喜びさせて悪いがカイト、今、その血清が今にも底をつきかけている。今ここに残っているのが五十倍に薄めたものだけだ」

やっと事態の飲み込めた快斗は、呆然としてソファの背もたれに深く座り込んだ。

「俺がカーティスから預かった小瓶は全部で十ある。このうち三つは俺の任務遂行で最低限必要な分にあたるから、君達に置いていけるのは全部で七瓶だ。効果は持って七時間。よく注意して慎重に使ってくれ」

ビジネスバッグから次々に同じ形の七瓶を取り出すと、グレンヴィルは声を落として忠告した。

「いいか、今までのものとは違い、効果が切れるのはゆっくりではなく突然だ。それを忘れると命取りになるぞ」

ラディスラスは「わかった」と、小瓶を受け取った。

「さ、そろそろ出発しないと。遅れをとった」

グレンヴィルは立ち上がり部屋の入り口にかけてあった上着に手を伸ばした。

「おじ様、もう行ってしまうの？」

ケイティーが少し淋しそうな表情を浮かべる。

「ああ。」特別な血”を見つける為に今はイギリス国内をあちこち飛び回つてるところだからね。早いとこ見つけないと、別の一族の動きも最近ではやけに活発化してきているから・・・」

上着を羽織り、目深に洒落た帽子を被るとグレンヴィルはにへらと不似合いな間抜けな笑みを溢した。

「いや~~~~、おじさん嬉しいな~~~~、ケイティーに淋しそうにして貰えるなんて！ さ、おじさんに別れの抱擁を・・・」

ぱつと腕を拡げてケイティーに歩み寄ろうとするグレンヴィルの額に、ゴンと黒い塊がぶつけられた。

「がっ！」

皮の靴だった。固い皮の靴。

「馬鹿も大概にしるよ。ケイティーを圧死させる気が」

左足の靴を失った足、ソックスだけの状態で何事も無かったかのように椅子に腰掛けるラディスラスの右足に組まれている。

「・・・酷いな、ラディ。そうか、ラディもお別れの抱擁をして欲しかったんだな！！ なんだなんだ、最初からそう言ってくれば喜んで・・・」

くるりと方向を転換して駆け寄る男に今度はもう片方の靴を投げ付け、ラディスラスが叫ぶ。

「遠慮しておく！ 早く行ってしまうえ、このオッサンめ！」

（ひ、ひどい・・・！！）

その場にいた三人は心の中で咄嗟に思っていた。

「ぐすん・・・」

ラディスラスのオッサン発言にあまりにショックを受けたグレンヴィルがぐくりと膝について打ちひしがれている。

「グ・・・グレンヴィルさん？」

憐れに思った快斗が思わずグレンヴィルの肩に手を伸ばす。

がしり！！！！

強く握られた快斗の手がメキメキと音を立てる。

「いつ！！！！」

痛みで顔を歪める快斗に、グレンヴィルが言った。

「ああ〜〜、カイト、君だけだよ、俺の味方は！！ あ、思わず強く握りすぎてしまった・・・・！！」

はっとした時には既に遅く、快斗の手はどう見ても骨折に至っていた。

ほら見ろとでも言うように、ラディスラスが呆れたように溜息をつく。

「す、すまない・・・」

しょんぼり肩を落とすグレンヴィルに、快斗は痛む手を擦りながら、ぎりぎりの苦笑いを浮かべた。

「い、いいんです・・・」

（いつてててて・・・・・・）

少し涙目の快斗の背に、レイモンドが苦笑を浮かべながらぼんと手を置いた。

「父さんは感情が高ぶると力のコントロールがきかなくなるから要注意だよ。手、大丈夫？」

快斗の手を見るなり、「大丈夫、すぐ治るよ」と慰めた。

「本当にすまなかったね。今度この埋め合わせは必ずするからね」グレンヴィルは申し訳なさそうに頭を掻くと、すっと立ち上がった。

『カイト、ラディを頼んだよ』

耳元でこっそり囁くと、グレンヴィルは目深に帽子を被り直し、モーターの部屋を出ていった。

勿論のこと、肉体の全てが研ぎ澄まされている状態のラディスラスの耳に届いていない訳も無く、グレンヴィルの去り際の囁きに、ちつと舌打ちをする。

「言っておくが、誰もお前に期待などしていないからな。ただ、僕達の足を引つ張るような真似だけはしないでくれよ」

ふんつと言い捨てると、つかつかとラディスラスは受け取った小瓶を持って部屋のクローゼットへ向かう。隠れ家を失ったせいで、しばらくはこのモーテルの一室で過ごすことになりそうだ。

そんなラディスラスの態度に、快斗は苛立ちを隠せなかった。

「俺だって、好きでこうなったんじゃない！ お前が俺を助けるからこうなったんだ。気に食わないなら今すぐ俺を殺せばいい！」

「なんだと・・・？」

きつと赤い目で睨むと、次に快斗が瞬きをして目を開いたときには、いつの間にかラディスラスの赤い目と整った顔が目の前にあった。

「調子に乗るな。言ったら、お前を生かすも殺すも僕が決める。お前がそれを僕に意見することは許さない」

並ぶと、快斗より十センチは高い身長 of ラディスラスは、ぐんといとも簡単に快斗の胸倉を掴んだ。

「ちよとラディ、やめて！ 他の部屋にお客さんも泊まっているのよ？」

ケイティーが快斗の胸倉を掴むラディスラスの手をそつと握った。相変わらず赤い目は快斗を睨んでいたが、快斗はそれに怯むことなく言った。

「俺の運命は俺自身で決める。お前なんかには握られてたまるか」

レイモンドもケイティーも、内心ひどく驚いていた。

十七という歳の割に、百六十しかない身長 of 彼は、北欧人からすればまだ少年のようにしか見えない程幼くも見える。そんな彼が自分よりも大きく、そして遙かに強いとわかる相手にまるで怯えたり

怯んだりすることをしないことに……。

（カイト、君は……）

レイモンドはその先を決して口には出さずに、しばらくはそつと心の中にしまっておくことにした。レイモンドと同じように何かを感じたのだろう、ラディスラスも黙って掴んでいた手をそつと離れた。

「そこまで言うのなら、いいことを教えておいてやる」

ラディスラスの目は快斗の赤味があった目をじつと見つめている。「特別な血」を見つけ出す、それがお前にとって最善の方法になる。特別な血を見つけ出せさえすれば、血清を新たに作り出すことが可能となり、向こう数百年は血清に困ることはなくなるだろう。即ちお前も血清を注入し続けることで、今まで通り人間のままの姿で歳を重ね、元の暮らしを取り戻すことができる」

快斗は我耳を疑った。もう後戻りはできないだろうと思っていたのに、まさか、そんな神か仏の救いが残されていようとは思ってもしなかったのだ。

「……が、その血は数百年に一度、たった一人だけが持つて生まれるもの。この時代にその血が存在するのは誰にもわからない」途端にがつくりと肩を落とすかと思いきや、快斗は目を輝かせた。「でも、可能性はゼロじゃないってことだよな！？ 探せば、その“特別な血”を持つてる人がどこかにいるかもしれないんだよな！？」

この反応は、また三人を驚かせた。

「え、ええ……」

ケイティーが目を丸くしながら頷いた。

「それじゃあ探すよ！！ 俺、その人を探す！！」

快斗は笑窪をつくって目を輝かせた。

「でもカイト、“特別な血”がもしどこにも存在しなかったらどうする気なんだ？」

レイモンドが思わず口を挟む。

「存在しなきゃその時はその時だよ。今、何もしないでばんやり過ごすよりは、どこかにその血を持つ人がいるかもしれないと思って努力する方がずっといいだろ？」

一度は諦めた人間としての人生。ひょっとしたら奇跡が起きて取り戻ことができるかもしれない、そんな風に快斗は僅かな期待に夢を託してみようと素直に感じたのだ。

「あなたって、ほんとに凄いわ、カイト。日本人ってみんなそうなの？」

ケイティーがすっかり感心したようにそう訊ねるが、「なにが？」と当の本人はきょとんと彼女を見返してくる。

「じゃあ探し出してみろ。お前がその血を探し出せば、僕はお前との契約を無条件で無効にしてやる。自由を手に入れてみるカイト・オオミ」

ケイティーとレイモンドは顔を見合わせた。

「これではまるで、」僕はお前に期待しているぞ」と言っているようなものではないかと気付いたからだ。

「言っただけヴァレンタイン！ 忘れるなよその言葉！」

快斗は強い意志の籠った目で、ラデイスラスを見つめた。

「カイトー！！！！　いたら返事して！！」

ジェニーが喉に痛みを感じる位大声で叫んでいた。

「カイトー！！　どこだ！！」

テッドも今、後悔の念で胸がいつぱいになっていた。自分があんなにも遅刻しなければこんなことにならなかったかもしれないという思いが、ぐるぐると胸の中を駆けずり回る。

「この辺りにはいないんじゃないか・・・？　別の場所を探してみよう」

ネイサンが息を切らしながら仲間に声を掛けた。

「・・・ちょ・・・ちよつと、あれ見て！！」

ふとネイサンを振り返った拍子に、ヴェラの視界に煙が舞い上がるのが見えた。

「なに、あれ・・・？」

はっとしてジェニーがその煙を見つめる。

「火事じゃないか！？」

「あれって、教会の方じゃない？？」

誰もがはっとして顔を見合わせた。

「まさか、快斗があれに巻き込まれてるってことないよね・・・？」

ジェニーが駆け出す。仲間の誰よりも速く駆け出した。

「と、とにかく消防にすぐ連絡を・・・！」

ネイサンがあたふたと携帯をポケットから取り出す。

「ダメだ、圏外だ・・・」

「お前は一度学校へ戻って先生達に知らせろ！！　俺たちは先に向かってカイトがいないか見に行ってくる！！」

テッドはそう指示すると、慌ててジェニーの後を追った。ネイサンは「わかった！」と返事すると同時に、学校に向けて駆け出す。

誰もが、あの純粋な日本からの留学生快斗の無事を祈っていた。

「カイトー！ー！！！」

教会のほとんどは燃え落ち、既に半焼している。けれどその炎は未だ古びた教会を包み込んでいた。

「どうしよう・・・、もしこの中にカイトが取り残されていたら・・・??」

ジェニーがテッドの腕に縋るように抱きついた。その目は既に涙で潤んでいる。

「まだそうと決まった訳じゃない、だろ・・・？」

そつとジェニーの肩を抱き寄せると、テッドは自分に言い聞かせるようにそう言った。

「二人とも、ちょっとこれ見て・・・！！」

少し離れたところで、ヴェラが震える声でそう叫んだ。

「う・・・嘘・・・」

ジェニーが口を押さえて崩れ落ちた。

「これって、快斗の携帯だよな？」

テッドはヴェラの手の中のそれを見てそう確信する。彼の携帯には、ストラップの変わりに日本から持ってきていた布製のチャームがつけられていたのだ。それは日本では”お守り”と呼ぶと彼が話していた。

「ヴェラ、これどこにあった・・・？」

ヴェラが指差したのは、教会からいくらかも離れていない草の茂みの中。

これでカイトが少なくともこの場所に昨晚訪れたということが証明されてしまった・・・。

「カイト・・・！ カイト！！！！」

ジェニーは半狂乱になって叫んでいた。

燃え盛る炎は、悲しげに天に向けて黒い煙を巻き上げていた。

(6) 偽装の日常

あの日から、快斗とラデイスラス・ヴァレンティンの奇妙な関係が始まった。

快斗はパンのかけらを口に放り込みながら、偽装とはいえ一時の変わらぬ日を心から喜んでいた。

そして、今でも頭に妬き付いて離れない、あの地獄の夜から一夜明けた次の日の出来事を回想していた。

あの日の昼頃、血清を注射した快斗は、周囲に怪しまれることのないように、一旦学校に戻ることにした。

学校の前には数台のパトカーが停車し、なんとも言えない緊迫した雰囲気漂っていた。

まさか、教会の火事に自分が巻き込まれたと騒ぎになっていたとも知らずに……。

「これ一体どうしたの？　なんかあった？」

暗い面持ちで校舎の入り口に座り込んでいた仲間に背後から声をかけると、仲間はまるで幽霊でも見たかのように間抜けな顔で快斗を見つめたのだった。

「快斗……！　お前生きて……」

テッドががしりと強く快斗の手首を握った。

「え？」

「え、じゃないよ！！　あんた今までどこ行ってたのよ！？　昨日からあんたが戻らないから、あの教会の火事にでも巻き込まれたんじゃないかって、皆パニックになってたんだよ！？」

ヴェラが唾を飛ばしながら言った。その目は僅かに潤んでいる。

「そ、それマジ……？　ごめん、ちょっと色々あって……」

えらいことになったと初めて気がついた快斗は、申し訳ない気持

ちでしゅんと頭を下げた。実際、一度は死んだも同然の身なのだから・・・。

「色々ってなんだよ!? 一体何があつたっていうんだよ!?」

テッドがほとんど怒鳴りつけるような気迫で快斗に詰め寄った。

けれど、まさかヴァンパイアに襲われて死にかけてましたなんて説明ができる筈も無く、快斗は黙り込んだままちらりと遠くのラデイスラス達三人に視線を泳がせる。

(!!!)

あれだけ離れているにも関わらず、ラデイスラスは確かに快斗をじつと見つめていた。それは、明らかに”余計なことを言うんじゃない”という脅迫を込めた視線だ。

緊張による心臓の高鳴りを抑えようと、快斗は顔を引き攣らせながら仲間に見線を戻す。

「おいカイト! 俺らがどれだけ心配したのかわかってんのか!? ちゃんと説明しろって!」

快斗は心を決めた。彼らを巻き込む訳にはいかない。

「・・・実は、昨晚持病の発作が出てさ、気分が悪くなつて教会の近くまで行つたところまでは覚えてるんだけど、どうやらその後気を失つたらしくって、はつきりと覚えてないんだ」

嘘は慣れていない。けれど、決してここで彼らに嘘だと勘付かれたいけなかった。じつと彼らの目を見て話すことができず、快斗はずっと視線を地面に落とした。心の中ではひどく動揺しているのに、口だけは別の人のもののようにやけに淡々と嘘を吐き続けていく。「持病!? お前今までそんなこと一度だって言わなかったぜ!?」

一体なんつつ病気なん・・・」

そうテッドが返す言葉の最中に、ぐいと快斗の身体が引き寄せられ、次の瞬間には柔らかく温かい腕に抱きしめられていた。

「カイト・・・! 無事で良かった・・・!」

快斗は訳がわからず頭が真っ白になっていた。

「ジェニー・・・??」

黙ったままぎゅっと抱きしめてくるジェニーの肩は小さく揺れていた。

「泣いてるのか？」

「良かった・・・。もしカイトが死んでたらって思ったら、私・・・！」

そのまま口を噤んでしまった彼女の背を、優しく擦ってやった。
できるなら、このまま仲間達に何も知らないまま平穏な日々を送って欲しいと心から願って・・・。

それから数日が経ち、快斗は今のよう以前と変わらぬ日常を送り、いつもと変わることなくパンを頬張っていた。

ただ、大きく変わってしまったことが一つ。

定期的に血清を打たなければならないということ・・・。そして、あの日からラディスラス・ヴァレンティン達と妙な関係が始まってしまったということ・・・。

「ね、カイト、何ぼんやりしてんの!？」

ヴェラが相も変わらず大きなサンドイッチを片手に快斗に言った。

「へ? なんの話してたっけ」

ぼんやりして何か考えていることの多くなった快斗に、仲間はいく首傾げていた。以前は何かに思い悩むなんてことはこの純情青年

にはまずなかったせいだ。

「だからさ、また来たよってば。あの人達」

ふと視線を上げると、人の良さそうな笑みを浮かべたブロンドの好青年と、猫のように大きく可憐な目で微笑む少女がこちらへ向かって歩いてくるところだった。

「やあカイト。調子はどうだい？」

すらりとした完璧は容姿のレイモンドは、同じ学校に通う者とは到底思えない程大人びていて、そしてそれは学校中の女の子の視線を釘付けにしていた。

「まあね、悪くは無いかな」

そしてその隣には、彼に引けを取らないケイティの姿が。密かに生息しているケイティファンが、大っぴらに活動をしないにはこのレイモンドという存在が抑止力となっていると言って過言ではない。

「それは良かったわ。よければ、一緒にランチしない？」

彼らが快斗に声をかけるのは、そろそろ血清の効果の切れる時間が近付いている、という忠告を込めての意だ。

それは快斗にもよくわかってはいるのだが、以前は全くと言っていい程関わり合いの無かった別世界の三人に頻繁に呼び出されるのを見て、仲間が訝し気な目を向けていることが気になって仕方が無いのだ。

ましてや、その後の気まずいことはこの上無い。

「いいよ、カイト。行ってくれば？ 僕たちはもうすぐ食べ終わるとこだし」

ネイサンがちらつと完璧な二人を一瞥し、何食わぬ顔で快斗に言った。

その反面、明らかにジェニーの機嫌が悪くなり、ぶすつとした顔で食べ終えたパンの包みをくしゃつと丸める姿が目に入った。

「そ、ごめんなさいね。少しカイトを借りてくわね」

誰もを虜にするだろう笑みに、テッドが顔を赤くしてこくこくと頷く。

快斗に拒否権は一切無く、仕方無く食べかけのパンを包み直して席を立った。

レイモンドとケイティー、そしてカイトが行ってしまったあとジエニーが「あーあ」と不機嫌な声を漏らした。

「一体カイトってばどうしちゃったの？　今まで彼らと話したこともなかったのに、あの事件の日以来あんなに親しくしちゃって」

「でれでれすんなよ、バカっ」

ケイティーの横顔をにやにやしながら見つめるテッドを、ヴェラがパシリと頭を叩いた。テッドはちえつと口を尖らせて椅子に座りなおす。

皆ジエニーの不機嫌に気をつかっていた。彼らがやってきて快斗を連れ出す度、ジエニーの不機嫌がひどくなるせいだ。

「確かに、妙だな……。あの日から突然彼らと関わり合いをもつようになっただって話も」

ネイサンが小首を傾げる。

「あいつ、持病だとかなんとか抜かしてたけど、実はケイティー・マクレーンとあの晩何かあったんじゃないかねえ？」

テッドが頭の上で腕組みし、つまらなさそうに言う。

「まさか、あの純情ボーイが？　まず無いでしょ」

ヴェラがジエニーの顔色が変わったのを見て、慌ててフォローを入れる。

「まあ……。ケイティー・マクレーンとどうにかなっただって話はなかったとしても、あの晩に彼らと何かしらのやり取りがあったことに間違いはなさそうだ」

ネイサンが眼鏡をくいと持ち上げながらそう付け足した。

「やり取りってどんな？」

ジエニーが不機嫌な声で質問する。

「さあ、そこまでは情報が不足していて推測できないけれど、感じた弱みでも握られているとか、そんな感じだろうか・・・」

ぎゅっと唇を噛むと、ジェニーが遠くなる快斗の後ろ姿をじっと見つめて言った。

「だとしたら、カイトはどうして私達に話さないんだろう？」

「何か言えない事情でもあるんじゃない？　ね、ジェニー、あの子が言いたくなるまで気長に待とう？」

ヴェラは気付いていた。ジェニーが快斗に抱く特別な感情を・・・。

「それからさ、妙なことを耳にしたんだけど・・・、あの教会の焼け跡から、とんでもないものが見つかったらしいよ」

ネイサンは小声で囁いた。あまり大きな声では言えない内容のものらしい。

三人は姿勢を低くしてネイサンの話に耳を傾ける。

「本当かどうかはわからないけど、殆ど炭化した人間の身体の一部らしきものが出てきたって。親父さんが警察署に勤めてる後輩が言ってるのをちらつと聞いたんだ・・・」

三人は眉を顰めた。

「じゃあ、あれはただの火事じゃないってこと・・・？」

「さあね、そこまでは僕にも・・・」

肩を竦めると、ネイサンが声の大きさを元に戻した。

「でもさ、なんか匂うと思わない？」

くんくんと周囲の匂いを嗅ぐと、テッドが「何も匂わねえけど？」と馬鹿な発言をする。

「違うよ、馬鹿。怪しくないかって意味だよ」

またしてもパシリとヴェラに頭を叩かれて、テッドがまた唇を尖らせる。

「ここからは、僕の個人的な想像でしかないけれど、その火事と快斗に何らかの関係があるんじゃないかと思えて仕方無いんだ。そし

て、ラディスラス・ヴァレンタイン、ケイティー・マクレーン、そしてレイモンド・ウォレスの三人にも・・・」

はっとしてジェニー、ヴェラ、テッドの三人は互いにこくりと言葉を飲み込んだ。

人気の無いあのトイレの扉を開けると、ラディスラスがしれっとした顔で腕組みして待ち構えていた。

「ラディ、血清はもう打った？」

ケイティーが洒落た茶色い皮のバッグから注射器とあの血清の入った小瓶を取り出すと、慣れた手つきで準備を始めた。ラディスラスが小さく頷いた。

ここでこうして快斗が血清の入った注射を打つのはこれで四回目になる。限られた量の血清を打つのは、学校にいる間だけのみ。モーターに戻ってから四人とも血清無しでなんとか耐え忍んでいたケイティーとレイモンドも、事件前の血清の効果はすでに切れていたのだ。

「やっぱりカイトは俺達より血清の効果は約二倍の十二時間もっているね」

レイモンドが興味深げにそう言った。

快斗がその意味を知ったのはつい昨日のことであった。

あの悪夢の日、自分の意思に関わらず、ラディスラスの”血約”によりナノマシンの交じった血液を体内に流し込まれた快斗は、彼

らと同様、驚異的なパワーと回復力を持ったヴァンパイアへと変貌を遂げてしまった。そのことに強い怒りと落胆を覚えた快斗だったが、自分がヴァンパイアとしては未完成な存在だということをレイモンドの口から聞いたのだった。

「君の身体には確かにナノマシンが存在し、俺達の仲間になったことは間違いない。けれど、君の場合は少し特殊で、俺達種族の間では”ハーフ”とそう呼ばれてる」

そう彼は説明した。

ハーフと完全体とのはっきりとした違いは、あるナノマシンが体内に存在するかしないかということだった。この世界の何を一つ知らない快斗に、少しでもわかりやすく解説する為、彼はナノマシンを蟻に例えた。

「女王蟻が卵を産み、働き蟻達がひたすら餌を運ぶように、ナノマシンも体内でほぼ同じ働きをしている。クイーンナノは脳が一番深い所に潜み、そこで体内に必要な数のナノマシンを作ったり、修理したりしている。俺やケイティー、ラディの体内では常にそのサイクルが行われているけれど、君の体内にはクイーンナノは存在しない。それに加えて、ラディスラスの体内から得た分だけのナノマシンしか君は体内に持っていないことになる。その分俺達よりも治癒力は劣るし、パワーも半減する」

クイーンナノが存在しないことから、新たにナノマシンが体内で生み出されることが無いとは言え、クイーンナノが存在しないせいでごく稀にナノマシンがバグを起こすことがあるという恐ろしい話も。快斗は聞かされていた。そのバグがどういった症状として現れるかは、レイモンドはあまり教えたくはなさそうだった。快斗自身、あまり聞きたくない思いもあったし、ラディスラスの代わりに説明責任を果たそうとする彼を、あまり困らせたくはなかったので、問い質すようなことはしないでおいたのだ。

ともあれ、ナノマシンはとても精巧且つ頑丈なもので、滅多に壊れたりすることがないというのが、せめてものの心の救いであった。

「ラデイ、どうしたの？ 難しい顔をして」

さつきから一言も発しないラデイスラスの異変に勘付き、ケイティーが自らの腕に血清を打ちながら訊ねた。ラデイスラスが難しい顔をしているのは、いつものことじゃないかと、快斗は心の中でそう思った。

「もうここには長居できないだろう」

じつと何かを考え込んでいるかのように、洗面台の上に腰掛け、ラデイスラスは濃く長いブラウンの睫毛を落とした。どこからどう見て彼が何世紀もの間生きてきたとは思えない程、彼の姿は若く美しい。けれど、その整った横顔がどこかしらひどく大人びて見えた。

「・・・何かあったの？」

長居できないとは事件の後もよく話してはいたが、今のラデイスラスの話し方だと、すぐにでもどこか別のところへ行かなければならないようにも聞こえた。

「貴族院の指示を待つんじゃないか？ 父さんもその方がいいって話していたよね」

急な話に、レイモンドが慌ててラデイスラスに聞き返す。限られた血清しか持たない今、下手に動くと逆に命とりになり兼ねないと、グレンヴィルに忠告されていたのだ。

「さつき、匂いがした・・・」

「何の？」

ケイティーがそう言った直後、はつとして眉を顰めた。

「・・・ヴァンパイアの？」

じつと見つめ返してきた深い焦げ茶の瞳が、それを肯定していた。

「血清の効果が切れる直前、ある男と擦れ違った。そのとき、僅かだが同種の匂いがした・・・」

ラデイスラスの話すことが状況的にかなりまずいことを指していた。

これもレイモンドが話していたことなのだが、ヴァンパイアの感覚はナノマシンの働きにより、全てにおいて研ぎ澄まされており、嗅覚もその例外ではない。人間ではとても嗅ぎ分けることのできないような匂いも、彼らは逸早く嗅ぎ分ける。血清の切れ掛かった状態のラディスラスがその男の匂いを感じ取ったという話も、あなたがちおかしくはないという訳だ。

「ある男って？」

打ち終えて空になった注射器をケースに収めながら、レイモンドは言った。

「見ない顔だ。スーツを見につけていた……。歳格好は四十前後……。どういう訳か奴は僕に気付いてはいなかったようだが……」
ケースの蓋をぱちりと閉じ、レイモンドは何やら考えているかのように手の動きを止めた。

「しかし妙だな……。その男が何者なのかは知らないが、奴が同種ならラディの匂いに気付かない筈はないのに……」

「ひょっとして、教会の男達を探しに来たのかしら……??」

不安そうな表情を浮かべ、ケイティーはラディスラスを見つめる。
「そこまではわからない……。けれど、奴が僕らの味方だとは考えにくいだろう……」

どうやら、すぐそこまで新たな危険因子が密かに歩み寄ってきているようだった。

「いつ発つ？ 今晚？」

ケイティーのその言葉に、快斗ははっとして顔を上げる。

偽の日常であれ、彼はさっきまで仲間達と何事も無い過ごししていたのだ。

「何にせよ、早い方がいいだろう。幸いにも奴にはまだ僕達の存在は気付かれてはいない。気付かれる前になるべく遠くへ移動するのが得策だろう」

気付いたときには、快斗は壁を拳で叩きつけていた。

「ふざけんな。なんだよそれ」

三人は驚いたように快斗を見つめる。いや、ラディスラスだけは変わらぬ表情で快斗に静かな視線を向けている。

「俺は行かない」

快斗は吐き気がする程の感情の高ぶりを感じた。それは強い怒り。これ以上ラディスラスに自分の人生を好き勝手に左右されるなんてまっぴらだと。

「お前の意思は聞いていない」

「知るか！ 行くんなら勝手にどこへでも行きやいだろ！？ 俺にはここでの暮らしがあつて、友達もいる！ それに家族を裏切るような真似なんかできるか！」

今にもラディスラスに掴み掛かろうとしている快斗の腕を、レイモンドがさり気無く掴む。

「まあまあ、快斗落ち着いて。何も、ここから永久に離れるなんて話してないだろ？ しばらくして落ち着いたら、また戻ってくればいい」

なるだけ柔らかい口調でレイモンドが宥めるが、それを無に帰すような言い方でラディスラスが言葉を連ねる。

「ああ。数十年もすればの話だな」

ふんつと笑いを漏らすと、ラディスラスは整った唇の端を意地悪く吊り上げた。

「なに！？」

「ちよつと、ラディ！ いい加減にして！」

見兼ねたケイティーがとうとうラディスラスを叱った。

面白くなさそうにぷいとそっぽを向くラディスラスに、快斗は叫んだ。

「兎に角、俺は行かない！！」

「忠告しておくが、血清無しで人間と過ごすことは不可能だ。そして血清無しで奴から身を隠すこともな」

普段は感情を露わにしないラディスラスが、いつも以上に声を荒

げている。

「へえ、そうかよ。俺が奴に見つかれば、自分の存在も嗅ぎ付けられるんじゃないかって心配してんのかよ？」

じつと目を細め、ラディスラスは自分よりも小柄な快斗を見下ろした。その口は閉じられたまま。

「はっ、凶星つて訳だ。心配しなくても、俺はあんたらのことは話さない」

心底軽蔑したように、快斗は頭をがしと掻き、情けない笑みを漏らした。心のどこかで、ラディスラスが自分を生かしたのは何か理由があつたんじゃないかと期待していた部分もあつたのかもしれない。けれど、今、その僅かな期待さえも木っ端微塵に砕け散ってしまっていた。

（結局、こいつは自分が良ければそれでいいって奴だったつつうことか・・・）

以前からもうわかっていた筈のことだったが、それでもまだ快斗の心の穴は、また一回り大きく広がってしまったような気がした。ケイティーが何か言おうとしたが、レイモンドが彼女の肩に手を置き首を横に振った。今は何も言うなという合図だ。

悲しい目をして、ケイティーが頷く。

「・・・ね、ラディ。相手は一人なんだし、まだこつちに気付いてないんでしょ？ このまま上手に血清を使っていけば、その人がわたし達に気付かないままここを立ち去るってことも考えられない？」

レイモンドがそれを後押しするかのように付け加えた。

「確かに、教会の二人がこの一族の出身なのかを俺達も知っておく必要がある。父さんが言っていたように、禁忌を破りナノマシン製造をどこかの一族が行っているとなると、見逃すことはできないよ」

ケイティーは言った。

「危なくなればすぐにここを発てばいい。もう少しその男の動きを探ってみましょう？」

二人の言うことは正しかった。けれど、それには快斗の気持ちを汲み取ってやって欲しいという願いも強く表れていた。

「・・・勝手にしろ」

不機嫌に三人に背を向けると、ラディスラスはトイレを出て行ってしまった。

「二人とも・・・、ありがと・・・」

心優しい二人の若きヴァンパイアに、快斗はひどく感謝した。

中途半端な存在になってしまった快斗は、どうやら一人ぼっちにはなっていないかったようだ。少なくともここにいる二人は、彼の味方のようなのだ。

けれど、ケイティーはひどく心を痛めていた。快斗はどうやらラディスラスに憎しみに近い感情を抱いていることに気付いていたからだ。けれど同時に、ラディスラスがどうしてもただの気まぐれで快斗に自らの血を与え助けたとは思えなかった。あれ程感情を剥き出しにして声を荒げるラディスラスの姿など、これまで一度も見たことは無い。

そんなケイティーの心配を余所に、新たな事件が刻々と快斗に忍び寄ってきていた。

そして、ラディスラスの言うその男が、後に臨時でやってきた数学の教師だということがわかるのは、もう少し後のことになる・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7075m/>

ヴァレンティン家の食卓

2011年6月18日20時40分発行